

自己点検・評価報告書

I	自己点検・評価の目的	2
II	大学院統合新領域学府の教育上の特徴	2
III	分析項目ごとの自己評価	4
	分析項目 I 教育の実施体制	4
	分析項目 II 教育内容	12
	分析項目 III 教育方法	21
	分析項目 IV 学業の成果	35
IV	ユーザー感性学専攻の新たな取り組み	40

I 自己点検・評価の目的

- 1 九州大学大学院統合新領域学府は、学問の細分化によって生み出された膨大な知を再編成し、統合的な新しい科学的な知や価値を追求して、現代の科学や社会が抱える重要課題の解決に取り組むことのできる高度な専門の人材の育成を図ることを目的として平成21年4月に新たに設置された学府である。本学府は、学府設置と同時にスタートしたユーザー感性学専攻、オートモーティブサイエンス専攻及び平成23年4月に新たにスタートしたライブラリーサイエンス専攻の3専攻からなり、いずれも我が国初の大学院専攻として、現代社会や現代の科学に問われている実在的な課題から出発するところに特徴をもつ。それぞれの専攻は国際的な学術拠点として知のフロンティアを切り拓きながら産業界の高度な人材育成への熱望に応える大学院専攻である。
- 2 本自己点検・評価の目的は、平成23年3月31日に学年進行が完成したユーザー感性学専攻修士課程及び、平成26年3月31日に学年進行が完成した同専攻博士後期課程について、平成21年度から平成25年度の5年間にわたる教育研究活動を総括するために自己点検及び自己評価を行い、今後の統合新領域学府及びユーザー感性学専攻の教育研究水準の向上を図るものである。

II 大学院統合新領域学府の教育上の特徴

- 1 本学府の教育目的を達成するため、本学府では以下のアドミッションポリシーのもと入学者を受け入れている。

【アドミッションポリシー】

- ① 専攻の専門に係わる諸問題を学際的に解決し社会に成果を還元したいという意欲を有していること。
- ② 社会において先導的役割を果たしたいという意欲を有していること。
- ③ 柔軟な発想力、基本的なコミュニケーション能力、幅広い教養を有していること。
- ④ 社会人にあっては、企業や地域社会での経験、問題意識を大学において理論的に進化・体系化させたいという意欲を有していること。

このアドミッションポリシーに沿って、修士課程及び博士後期課程では一般選抜試験、社会人特別選抜試験、外国人を対象とした外国人留学生特別選抜試験を設け、多様な入学者選抜試験を実施している。

- 2 本学府ユーザー感性学専攻の修士課程では、2年以上在学し、36単位以上を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、本学府教授会の行う修士論文（又は特定の課題についての研究の成果）の審査及び最終試験に合格することを修了要件としている。

また、博士後期課程では、博士課程に5年（修士課程に2年以上在学し修了した者は、当該課程を修了した者にあっては、当該課程における2年の在学期間を含む。）以上在学し、48単位以上（他の専攻、学府又は他の大学院の修士課程を修了した者は博士後期課程にお

いて12単位以上)を修得し、かつ、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格することを修了要件としている。

これらを基本方針とし、明確かつ厳正な単位認定を行い、学位を授与することとしている。

3 ユーザー感性学専攻は、知の活用主体であるユーザーの観点から、また感性を基盤とする人間理解の上に立って感性価値の創造を推進する高度なプロデューサー型の専門人材を養成することを目的として設置された、我が国初の「感性」を科学する大学院である。本専攻では、感性を「科学」「コミュニケーション」「価値クリエーション」の視点から捉え、3つのコースを設けて教育研究を展開している。特に、「PTL(プロジェクトチーム演習)」では、企業、行政及び地域社会と協働し、実社会が抱える現実的な課題にチームで取り組み、問題発見・仮説設定・集団的な知識創造・解決策提示のプロセスを実践し、推進していく能力を養成している。また、多様性への対応力を養う研究指導體制を確保するため、「主指導教員・副指導教員制度」として、学生が履修するコース以外の教員が副指導教員を担当する制度を導入した。さらに平成22年度からは、2年次生を対象として各コースにおいて修士研究の中間発表会を6月頃月と11月頃の2回開催し、全教員が研究の進捗状況を確認すると共に多様な専門的立場から討議することにより、多面的な理解力や創出力を養成している。なお、この中間発表会を行うことで多様性への対応力の養成が十分可能であることが分かったので、主指導教員・副指導教員制度は23年度より廃止した。

4 これらの取組により、本学府におけるユーザー感性学専攻の教育目的を実現しているが、今後も、学内外の変化に対応して教育目的の着実な実現を図るために、引き続き教育体制、教育内容、教育成果、学生支援などの改善・向上を図っていく。

Ⅲ 分析項目ごとの自己評価

分析項目Ⅰ 教育の実施体制

(1) 観点ごとの分析

観点 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

ユーザー感性学専攻では、学府の教育目的を踏まえて教育目的を定め、それに沿ったコースを設定している。(資料1-1-A)

また、学府及び本専攻の教育目的は、九州大学学則第6条第2項の規定に基づき、「大学院統合新領域学府における教育研究上の目的に関する内規」として規定し、本学府のホームページでも公開している。

資料1-1-A 学府・専攻の教育目的

	コース/分野	教育目的
学府	—	科学的な知の統合と創造を通じて、現代の科学や社会が問いかける複合的かつ根源的な課題の究明に取り組み、その知的成果を社会に還元するとともに、自らそのような知の担い手として活躍する高度な専門人材を組織的に養成する。
ユーザー感性学専攻	感性科学コース、感性コミュニケーションコース、感性価値クリエーションコース	知の活用主体であるユーザーの視点から、また感性を基盤とする深い人間理解の上に立って、感性価値の創造を推進する高度なプロデューサー型の専門人材を養成する。

URL : http://www.ifs.kyushu-u.ac.jp/pages/ifs_01.html (学府)

http://www.ifs.kyushu-u.ac.jp/pages/ifs_01_02.html (ユーザー感性学専攻)

本専攻の修士課程及び博士後期課程における学生定員、入学者の状況並びに在学者の状況は資料1-1-B及び資料1-1-Cに示すとおりであり、充足率を適切に満たしている。

資料1-1-B 入学者の状況 (修士課程及び博士後期課程)

		平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	合計
修士課程	入学定員	30	30	30	30	30	-
	志願者数	60	70	54	43	75	302
	受験者数	57	68	53	41	75	294
	合格者数	34	44	34	34	50	162
	入学者数	33	42	33	31	37	176
	入学定員超過率	110%	140%	110%	103%	123%	117%
博士後期課程	入学定員			4	4	4	-
	志願者数			10	7	2	19
	受験者数			10	7	2	19
	合格者数			8	6	2	14
	入学者数			8	6	2	14
	入学定員超過率			175%	150%	50%	116%

資料 1 - 1 - C 収容定員と在籍者の状況

(修士課程及び博士後期課程 各年度 11 月 1 日現在)

		平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	
修士課程	収容定員	30	60	60	60	60	
	在籍者数	1 年次	37 (2) [12]	42 (6) [8]	33 (3) [4]	34 (8) [8]	43 (12) [8]
		2 年次		36 (2) [12]	49 (6) [13]	41 (3) [6]	39 (8) [10]
		計	37 (2) [12]	78 (8) [20]	82 (9) [11]	75 (11) [14]	82 (15) [18]
	充足率	123%	130%	136%	125%	136%	
博士後期課程	収容定員			4	8	12	
	在籍者数	1 年次			8 (2) [2]	6 (2) [2]	2 (0) [1]
		2 年次				8 (2) [2]	6 (2) [2]
		3 年次					8 (2) [2]
		計			8 (2) [2]	14 (4) [4]	16 (4) [5]
充足率			200%	175%	133%		

※ () は外国人留学生数、[]は社会人学生数であり、いずれも内数。

※ ユーザー感性学専攻修士課程における平成 21 年度 1 年次及び平成 22 年度 2 年次の在籍者数には、転学者者 4 名 (うち外国人留学生 1 名) を含む。

平成 20 年 10 月末に本専攻修士課程設置が認可された後、設置及び学生募集に係る様々な広報活動を行った。広報期間を十分に確保した後、平成 21 年 2 月及び 3 月に第 1 期生となる平成 21 年 4 月入学者の入学試験を実施した。時期的に学内外の他の大学院が行う入学試験からは大きく遅れをとったにもかかわらず、入学定員を大幅に超える志願者からの応募があった。また、博士後期課程においても平成 22 年 10 月に設置が許可された後、平成 23 年 2 月に第 1 期生となる平成 23 年 4 月入学者の入学試験を実施し、入学定員の 2 倍を超えるの志願者からの応募があった。このことは、本専攻が教授する新たな学問分野に対する社会的期待及び人材育成に係る社会的ニーズの高さが示されたものと考えている。

なお、合格者の入学／辞退の動向を可能な範囲で推測し、本学府のアドミッションポリシーに叶う志願者を合格とした (平成 21 年度合格者：修士課程 34 名、平成 22 年度合格者：修士課程 44 名、平成 23 年度合格者：修士課程 34 名、博士後期課程 8 名、平成 24 年度合格者：修士課程 34 名、博士後期課程 6 名、平成 25 年度：修士課程 50 名、博士後期課程 2 名)。結果として、入学者数は、平成 21 年度修士課程 33 名、平成 22 年度修士課程 42 名、平成 23 年度修士課程 33 名、博士後期課程は 8 名、平成 24 年度修士課程 31 名、博士後期課程 6 名、平成 25 年度修士課程 37 名、博士後期課程 2 名となり、充足率は毎年度 100% を超えているが、本専攻における教育遂行上の支障はなく、学府及び本専攻の目的に沿った人材育成が展開されている。今後は、志願者及び入学者の動向を注視しつつ適正な定員管理を行っていく。

資料1-1-D 専任教員配置状況及び所属研究院等（各年度4月1日現在）

	専任教員数					学生数					専任教員1人あたりの学生数					所属研究院 (平成25年4月1日現在)	
	職名	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度		平成25年度
修士課程	教授	10	10	11	11	11	37	78	82	75	82	1.95	4.11	4.32	3.95	4.32	人間環境学研究院 (5名) 医学研究院 (1名) 工学研究院 (2名) 芸術工学研究院 (8名) システム情報科学研究院 (1名) 農学研究院 (1名) 総合研究博物館 (1名)
	准教授	6	6	6	6	6											
	講師	1	1	1	1	1											
	助教	2	2	1	1	1											
	合計	19	19	19	19	19											
博士後期課程	教授				6	6			8	14	16		1.00	1.75	2.00	人間環境学研究院 (1名) 芸術工学研究院 (6名) システム情報科学研究院 (1名)	
	准教授				2	2											
	講師				0	0											
	助教				0	0											
	合計				8	8											

※ただし、学生数は各年度11月1日現在の在籍者数を記載。

本専攻に配置されている専任教員数は、資料1-1-Dに示すとおりである。専任教員一人当たりの学生数からみて、教育課程の遂行に必要な教員を十分に確保している。

また、大学院重点化している本学では、学校教育法第66条ただし書きにもとづき、平成12年度に全国初となる「学府・研究院制度」を設けた。これは、大学院の教育研究組織である「研究科」を大学院の教育組織としての「学府」と教員の所属する研究組織である「研究院」とに分離して、相互の柔軟な連携を可能にする制度であり、本制度を整備したことで本学では研究院の枠を超えた多様な教員が学府教育に参画することが可能となった。本学府では、前掲資料1-1-Aに示した学府及び本専攻の教育目的を達成するため、この「学府・研究院制度」を積極的に活用し、専門分野を異にする様々な教員が専任教員として参画する体制をとっている（資料1-1-D）。また、本学府の運営は構成員からなる学府教授会において行われている。

なお、本学府を担当する研究指導教員数及び研究指導補助教員数は、資料1-1-Eに示すとおりであり、大学院設置基準を満たしている。

資料1-1-E 研究指導教員等の配置状況

(平成21年4月1日現在から平成25年4月1日現在まで)

		大学院指導教員数							大学院設置基準上の必要教員数	うち研究指導教員
		研究指導教員数					研究指導補助教員数	合計		
		教授	准教授	講師	助教	計				
H21年度	修士課程	10	5	0	0	15	1	16	6	3
H22年度	修士課程	10	5	0	0	15	1	16	6	3
H23年度	修士課程	11	6	1	0	18	1	16	6	3
H24年度	修士課程	11	6	1	0	18	1	16	6	3
	博士後期課程	5	1	0	0	6	2	8	6	3
H25年度	修士課程	11	6	1	0	18	1	16	6	3
	博士後期課程	5	1	0	0	6	2	8	6	3

また、本専攻には、専門領域が専任教員と異なる学内教員や他の国公立大学の教員及び企業等の外部講師も参画している（資料1-1-F）。これは、各方面で優れた実績を有する講師を本学府に迎え、学際的かつ多面的な教育研究活動を展開し、本学府の特徴である「科学的な知の統合と創造」に取り組んでいくためである。

資料1-1-F 非常勤講師配置状況

専攻		非常勤講師(学内)	非常勤講師(学外)					合計
			企業	他大学	官公庁・自治体	研究機関	小計	
ユーザー感性学専攻	H21年度	9	2	1	1	1	5	14
	H22年度	9	2	1	1	1	5	14
	H23年度	8	2	1	1	2	6	16
	H24年度	6	2	0	0	3	5	11
	H25年度	6	1	1	0	3	5	11

観点 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

(観点に係る状況)

本学府における教育上の課題は、学府教授会、学府長・専攻長会議、各専攻の専攻運営会議、入試WG及び教務WGにて扱われている。

学府教授会では、学年暦の策定、入学試験の実施、学位授与方針、研究生の受入れ、奨学金の取扱い方針決定など、学府に共通する課題に関する協議がなされている。

また、本学府で行われる教育研究活動は、各専攻がそれぞれ自律的に展開していることから、授業科目の実施方法や授業の改善に向けた検討等は各専攻の専攻運営会議において協議されている。具体的には、本専攻では、実社会が抱える現実の課題に対してその解決策にチームで取り組む「プロジェクトチーム演習(P T L)」のテーマ策定や実施方法をはじめとする様々な検討を行っている。

なお、本学府では、専攻間の調整を図るために、月に1回程度、学府長・専攻長会議を開催している。本会議においては、例えば、平成22年度に新たに開講した「学府共通科目」の教育内容や担当教員の選定を行うなどの取り組みを行っている。その他、各専攻が開講するインターンシップの実施方法や学生の就職対応、学生の退学や長期履修に関する取り扱いに関する意見交換等を行っている。これにより、専攻間にまたがる課題の実務的な対応を図ると共に、情報共有による円滑な学府専攻運営を行っている。

以上のとおり、本学府では教育内容や教育方法の改善に向けた実施体制を組織的に構築しており、学府及び専攻の教育の質の向上に向けた取り組みを行っている。(資料1-2-A)。

また、本学府におけるFDは、各専攻において計画し実施されている。本専攻は「感性」を専門とする理系及び文系の関係教員から構成されており、文系と理系の両方の性質を合わせ持つ文理両棲の性格を有している。このため、平成21年度及び平成22年度は専攻内における「学問分野の統合」を図ることを念頭にFD活動を行った。

具体的には、本専攻にあっては、専門分野が異なる教員相互の教育スタイルを学びあったり、教員と学生による直接的なコミュニケーションの場を設け、学生の意見等を本専攻の教育研究活動に積極的に取り入れる体制を構築したりした(資料1-2-B)。

資料 1-2-A 教育内容、教育方法の改善に向けた取組

	教育上の課題	実施目的	改善に向けた実施体制と取組	実施実績
学府	学府共通科目の開講	学府共通科目を新たに開講することにより、教育目的である「科学的な知の統合と創造」を行うプロセスを修得し、その能力を養成する。また、専攻にとらわれずに学生が交流する協働環境を醸成・発揮する。	<p>[協議の実施体制] 学府長・専攻長会議 学府教授会</p> <p>[取組み] 学府長・専攻長会議において教育目的や内容の精査、担当教員の選考を行い、学府教授会において審議した。</p> <p>また、平成24年度末に前専攻の修士課程で完成年度を迎えたことから、「科学の統合方法論」のあり方を検討するため、あり方検討委員会を立ち上げ、検討を重ねた結果、学府共通科目を「統合新領域最先端セミナー」とし、平成25年10月入学者から受講することとした。</p>	<p>平成22年度に学府共通科目「科学の統合方法論」（必修科目）を新規に開講した。</p> <p>また、平成25年度10月入学者から「統合新領域最先端セミナー」に名称を変更した。</p> <p>対 象：修士課程1年 開講時期：前期 教育内容：学府の教育目的を達成するために、科学的な知の研究方法や知の統合のあり方に関して、科学的探求の仕組みとそのプロセス、異なる科学的探求の方法や知の転換・統合について講義を行うと共に、一部演習形式も取り入れることにより、本専攻及びオートモーティブサイエンス専攻の学生による協働環境を整える。本学府教員3名が担当した。平成24年度からは、ライブラリーサイエンス専攻が新たに設置されたことから、新専攻でも科目を開講し、担当教員も同専攻から1名加えた。</p> <p>平成25年10月からは「統合新領域最先端セミナー」とし、本学府を構成する3つの専攻の教員が、自身が研究を行っている分野の最先端領域について講義を行う。学生は他専攻教員の講義も受講することにより、自らが「科学的な知の統合と創造」を行うための基礎を学ぶ科目として再構築した。</p>

ユーザー感性学専攻	PTL（プロジェクトチーム演習）の充実	PTLは、本専攻における教育目的を達成するために開講している演習である。本科目は、実社会の問題解決に教員の指導のもと学生がチームで取り組み、知識を知恵に変換して生の喜びと社会の満足を協力して創造していくことを目的に開講しており、他の大学院でも類を見ない、本専攻の特徴的なカリキュラムの一つである。	<p>[実施体制] ユーザー感性学専攻運営会議</p> <p>[取組み] 実社会で現実や課題に対して、その解決を目指すためにチームで取り組むPTL(プロジェクトチーム演習)を行っている。当該PTLは平成22年度から実施している教育方法であり、今後、更なる充実発展のため、専攻運営会議主導のもと、全教員・全学生が集まり検討するラウンドテーブルを定期的に行い、改善に取り組んでいる(資料1-2-B)。</p> <p>本ミーティングでは、PTL以外の授業等の教育内容、方法においても今後の更なる発展のため、検討を行っている。</p>	本専攻は社会人学生が多数在籍しており、時間の制約等もあり、次年度以降は、社会人学生に配慮したカリキュラム、内容等に改善し、更なる充実を図る予定である。
	「特別研究」(必修)の充実	本科目は、教員の指導の下、自ら研究計画を立てて実施する演習科目である。「特別研究(1)」から「特別研究(2)」へ進展させ、最終的に専攻修了にふさわしい能力を実証しているかどうかを判断する。	<p>[実施体制] ユーザー感性学専攻運営会議</p> <p>[取組み] 本専攻では、多様性への対応力を高めるための研究指導体制を確保するために、主指導教員・副指導教員制度を平成23年度より廃止し、主指導教員を中心とした指導体制に変更し、同一コースの専任教員と協力し学生の専門的能力を向上させる指導を行うこととなった。</p>	平成22年度からは主指導教員・副指導教員制度に加え、各コースにおいて修士研究の中間発表会を7月と11月の年2回開催し、全教員が研究の進捗状況を確認すると共に多様な専門的立場から討議することにより、多面的な理解力や創出力を習得させることとした。

資料1-2-B FDの開催実績

(平成21年度～平成25年度)

<p>1. オリエンテーション：H21.4.8、H21.4.10、H22.4.9、H23.4.8、H24.4.6、H25.4.11 参加者：全教員 内容：全教員の参加による学生との懇談や教育方針のディスカッションやファシリテーターによる相互対話を行っており、直接的なコミュニケーションによって教員間及び教員と学生との意思疎通を図るなど共同実践的なFD研修の仕組みを構築している。</p> <p>2. プロジェクトチーム演習：開講後、随時開催 参加者：全教員 内容：本専攻の特色ともなっている「プロジェクトチーム演習」において、ワークショップ型のチーム授業を行い、教員相互の教育スタイルを学び合う体制を取っている。</p> <p>3. ユーザー感性学シンポジウム：平成23年度2回、平成24年度1回、平成25年度2回</p>

<p>参加者：各回70名程度（教員・学生・一般を含む）</p> <p>内 容：普段あまり交流の無かったデザイナーや企業担当者と直接交流ができるシンポジウム。就職や入試を含めた専攻教育全般を含めた社会からの意見を取り入れ修士における教育の指導等に反映している。</p>

資料1-2-D 全学FDの実施状況

	テーマ
平成21年度	新任教員の研修、体験活動を通じた学習成果の達成、学習成果達成のための教育プログラム開発
平成22年度	新任教員の研修、学生の自殺予防とメンタルヘルス対応、学生の「学力」と「学ぶ力」はどのように変わったか～今日の初年次学生の学習特性について～
平成23年度	新任教員の研修、教育の質向上支援プログラム成果発表会、心の危機の予防と連携～われわれ教職員にできること
平成24年度	新任教員の研修、教育、学習を次のステップへ（教育の質の向上支援プログラム成果発表会）、教職員向けメンタルヘルス研修会
平成25年度	新任教員の研修、授業改革をととして主体的な学びを育む

(2)分析項目に係る自己評価

本専攻は、教育目的を明確にし、それに沿った運営を行っている。

学生の在籍状況については、本学府のアドミッションポリシーに叶う人材を十分に確保できしており、充足率を超過してはいるものの、学生は本学府において何ら支障なく教育研究活動を行っている。また、教員数については、本専攻の教育研究に支障がない十分な数を配置している。これらの指導体制のもとで、本専攻において教育目的に沿った人材育成が展開されている。

また、教授会及び本専攻に置かれる各種会議において、学府の教育方法を改善するための検討がなされており、修士課程及び博士後期課程の実態に応じて常に改善を行える場を設けているなど、機能的な教育組織が編成され、実際に教育目的を達成するための改善が図られている。

分析項目Ⅱ 教育内容

(1) 観点ごとの分析

観点 教育課程の編成

(観点に係る状況)

本学府では、養成する人材像と学問分野・職業分野の特徴を踏まえて教育目的（前掲資料1-1-A）を設定し、ユーザー感性学専攻では、資料2-1-Aのように学府規則において修了要件を定め、授与する学位として、修士（感性学、芸術工学、工学）、博士（感性学、芸術工学、学術）と定めている。

資料2-1-A 修了要件

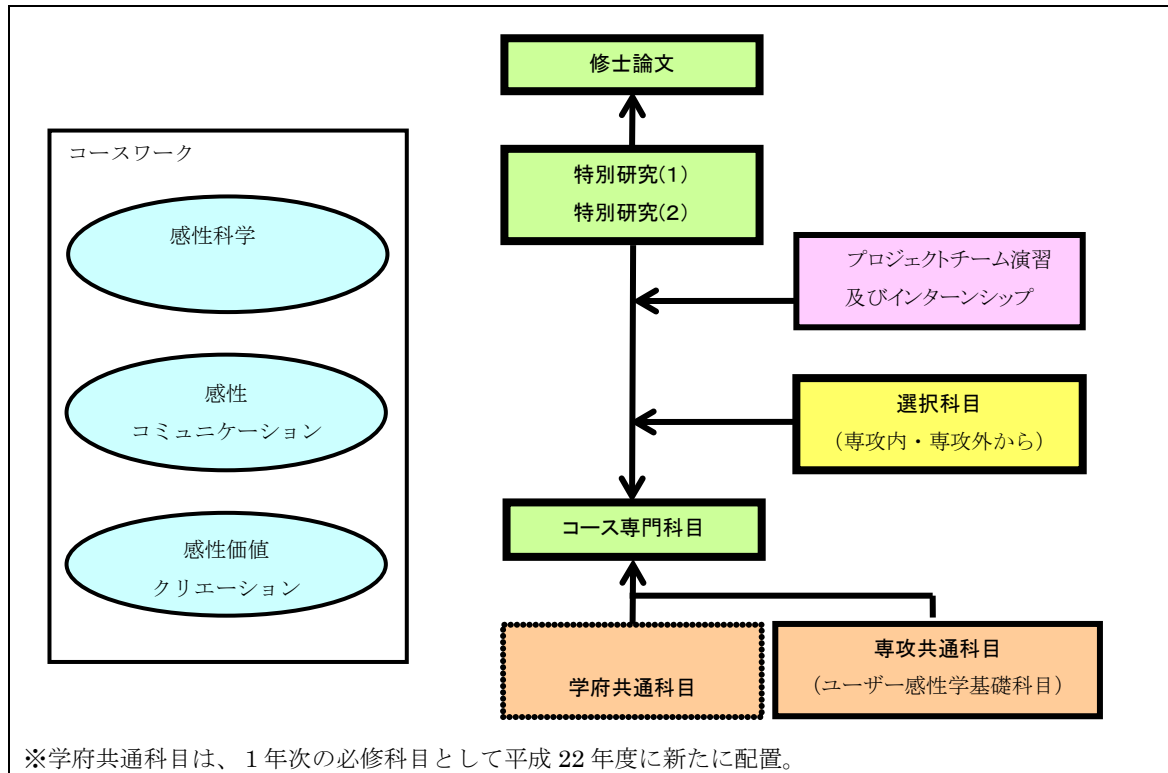
	修了要件
修士課程	<p>修士課程に2年以上在学し、平成21年度入学者にあつてはⅠの1から5、平成22年度入学者及び平成23年度入学者にあつてはⅡの1から6、平成24年度及び平成25年度入学者にあつてはⅢの1から6に掲げる単位を含む36単位以上を修得し、必要な研究指導を受けた上、本学府教授会の行う修士論文の審査及び最終試験に合格すること。</p> <p>Ⅰ（平成21年度入学者）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 科目区分「特別研究」について2科目6単位 2. 科目区分「ユーザー感性学基礎」について2科目4単位 3. 科目区分科目区分「PTL・インターンシップ」について3科目6単位 4. 科目区分「コース専門科目」のうち、自らが履修するコースの科目について5科目10単位 5. 次に掲げる科目について10単位以上（ただし、(2)及び(3)の授業科目で課程修了の要件となる単位に含めることができるのは、6単位までとする） <ol style="list-style-type: none"> (1) ユーザー感性学専攻の授業科目（ただし、上記1から4までの単位として修得した単位を除く） (2) 本学府他専攻の授業科目 (3) 他学府の授業科目（大学院共通教育科目を含む） <p>Ⅱ（平成22年度入学者・平成23年度入学者）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 科目区分「学府共通科目」について1科目1単位 2. 科目区分「特別研究」について2科目6単位 3. 科目区分「ユーザー感性学基礎」について2科目4単位 4. 科目区分「PTL・インターンシップ」について3科目6単位 5. 科目区分「コース専門科目」のうち、自らが履修するコースの科目について5科目10単位 6. 次に掲げる科目について9単位以上（ただし、(2)及び(3)の授業科目で課程修了の要件となる単位に含めることができるのは、6単位までとする） <ol style="list-style-type: none"> (1) ユーザー感性学専攻の授業科目（ただし、上記2から5までの単位として修得した単位を除く） (2) 本学府他専攻の授業科目 (3) 他学府の授業科目（大学院共通教育科目を含む） <p>Ⅲ（平成24年度入学者、平成25年度入学者）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 科目区分「学府共通科目」について1科目1単位 2. 科目区分「特別研究」について2科目6単位

	<p>3. 科目区分「ユーザー感性学基礎」について2科目4単位</p> <p>4. 科目区分「PTL・インターンシップ」について2科目4単位</p> <p>5. 科目区分「コース専門科目」のうち、自らが履修するコースの科目について5科目10単位</p> <p>6. 次に掲げる科目について11単位以上（ただし、(2)及び(3)の授業科目で課程修了の要件となる単位に含めることができるのは、6単位までとする）</p> <p>(1) ユーザー感性学専攻の授業科目（ただし、上記2から5までの単位として修得した単位を除く）</p> <p>(2) 本学府他専攻の授業科目</p> <p>(3) 他学府の授業科目（大学院共通教育科目を含む）</p> <p>ただし、本学府教授会が認めるときは、在学期間に関しては、優れた業績を上げた者については、修士課程に1年以上在学すれば足りるものとする。</p>
博士後期課程	<p>博士課程に5年（修士課程に2年以上在学し、当該課程を修了した者にあつては、当該課程における2年の在学期間を含む。）以上在学し、「ユーザー感性学特別研究」を含む12単位以上を修得し、必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格すること。</p> <p>1. 科目区分「特別研究」について1科目12単位</p> <p>2. 科目区分「分野専門科目」について6科目12単位</p> <p>ただし、本学府教授会が認めるときは、在学期間に関しては、すぐれた業績を上げた者については博士後期課程に1年以上在学すれば足りるものとする。</p>

出典：大学院統合新領域学府規則

本専攻では、知の活用主体であるユーザーの視点から、また感性を基盤とする深い人間理解の上に立って、感性価値の創造を推進する高度なプロデューサー型の専門人材の育成を行うため、資料2-1-Bに示す履修体系（修士課程）に基づき、資料2-1-Cに示す授業科目を配置している。

資料 2-1-B ユーザー感性学専攻 修士課程の履修体系図



資料 2-1-C ユーザー感性学専攻 修士課程の科目構成

科目区分	授業科目の名称	必修・選択	授業形態	
学府共通科目	科学の統合方法論 [1 単位] ※平成 25 年 10 月より「統合新領域最先端セミナー [1 単位]」に科目変更	必修	講義	
専攻共通科目	特別研究	特別研究 (1) [2 単位]、特別研究 (2) [4 単位]	必修 演習	
	ユーザー感性学基礎	感性科学概論、感性コミュニケーション概論、感性価値クリエーション概論 [各 2 単位]	選択必修 講義	
	PTL/インターンシップ	ユーザー感性学 PTL (1)、ユーザー感性学 PTL (2)、ユーザー感性学 PTL (3)、ユーザー感性学 PTL (4)、ユーザー感性学 PTL (5)、ユーザー感性学 PTL (6)、インターンシップ [各 2 単位] ※平成 23 年度より下記に科目変更 ユーザー感性学 PTL (感性科学 I)、ユーザー感性学 PTL (感性科学 II)、ユーザー感性学 PTL (感性コミュニケーション I)、ユーザー感性学 PTL (感性コミュニケーション II)、ユーザー感性学 PTL (感性コミュニケーション III)、ユーザー感性学 PTL (感性コミュニケーション IV)、ユーザー感性学 PTL (感性クリエーション I)、ユーザー感性学 PTL (感性クリエーション II)、ユーザー感性学 PTL (感性クリエーション III)、ユーザー感性学 PTL (感性クリエーション IV)、インターンシップ [各 2 単位]	選択必修	実験・実習
コース専門科目	感性科学コース	感性人類学、人間発達学、心理物理学、感覚生理心理学、感情生理心理学、適応行動論、感性生理学、感性心理学、美学、感性哲学、感覚生理心理学演習、感情生理心理学演習 [各 2 単位]	選択	講義/演習
	感性コミュニケーション	生涯発達心理学、認知体験過程論 (～平成 23 年度入学者まで)、異文化間コミュニケーション論、感性表現論、実践子ども学、現代子	選択	講義/演習

ンコース	ども文化論、小児家族看護学、チャイルド・ライフ・スペシャリスト論、小児・家族コミュニケーション演習、ファシリテーション演習、実践形成型フィールドワーク演習、創造的ディスカッション演習 [各2単位]		
感性価値クリエーションコース	次世代感性産業論、ブランド価値創成論、情報価値編集論、関係のデザイン論、景観価値形成論、自然環境価値形成論、地域文化デザイン論、クオリティカルテ価値評価論、プロジェクトマネジメント論、感性価値認知論、ユーザー参加型デザイン論、感性価値抽出論、感性マーケティング論 [各2単位]	選択	講義

学府及び本専攻の教育目的を達成するため、特徴的な教育課程を編成している。

本専攻では、感性価値の創造を推進する高度なプロデューサー型の専門人材を養成するため、感性を「科学」「コミュニケーション」「価値クリエーション」の3つの視点から捉え、「コース専門科目」において各コースにおける高度な専門知識を教授するだけでなく、実践的な知の修得を図るために、「専攻共通科目」において大学と社会の連携による実践型教育を実施している。実践型教育の一環として、社会現場が抱える課題にリアルタイムに取り組み「感性」を実践的に活用しながら課題の解決を図るチーム演習「ユーザー感性学 PTL」を配置しており、学期別に異なる課題を取り扱っている。これにより、学生は表現力・対話力・共感力・発想力・構想力・チーム協働力・実践力といった総合的な能力を高度に修得している。また、多様性への対応力を養う研究指導體制を確保するため、「主指導教員・副指導教員制度」として、学生が履修するコース以外の教員が副指導教員を担当する制度を導入した。さらに平成22年度からは、2年次生を対象として各コースにおいて修士研究の中間発表会を6月頃月と11月頃の2回開催し、全教員が研究の進捗状況を確認すると共に多様な専門的立場から討議することにより、多面的な理解力や創出力を養成している。なお、この中間発表会を行うことで多様性への対応力の養成が十分可能であることが分かったので、主指導教員・副指導教員制度は23年度より廃止した。

このように、大学院生に求められる知識や理論を理解し、高度な専門知識と実践的な研究能力を養うことができるように教育課程が編成されている。また、本専攻の運営会議等において、修了要件や科目構成等について常に検討を行い、議論を重ねた上でカリキュラムの改正等を行っている。

資料2-1-D 教育課程編成の特徴

	教育課程編成上の特徴
ユーザー感性学専攻	<p>本専攻では、広範な分野の大学卒業生・大学院の修了者及び企業・行政・NPOの実務に携わっている社会人など、多様な専門性と背景を持った人材を受け入れ、実践的な知の修得を促すこととしている。このため、以下の特徴ある教育課程を編成している。(社会人学生にあつては、自治体、病院、航空会社、通信会社、建築事務所、食品会社、フィットネス業界、学校教師など様々なバックグラウンドを持つ社会人学生が本専攻に在籍している。)</p> <p>①学生一人ひとりの出身分野や関心領域に応じてきめ細かい履修指導ができるよう、主指導教員・副指導教員を配置する。(多様で重厚な研究指導を行うため、主指導教員は学生が在籍するコースの教員が担当し、副指導教員は学生が在籍するコース以外の教員が担当する。)また、22年度から年に2回、修士論文中間発表会を各コースで開催し、各発表に対して教員全員がコメントすることによりきめ細かい指導を行い、修士論文の質的向上を図る。なお、この中間発表会を行うことで多様性への対応力の養成が十分可能であることが分かったので、主指導教員・副指導教員制度は23年度より廃止した。②「PTL(プロジェクトチーム演習)」や「インターンシップ」を科目として取り入れ、企業や行政等の社会が抱える現実の課題に対して、問題発見、仮説設定、知識創造、解決策提示のプロセスを実践・推進できる人材育成を図る。</p>

③学外から様々な著名な有識者を招き、「感性」に着目した人間の本質や根源により深くアプローチし探求する特別講演を行う。加えて、特別講演の企画段階から学生を参加させることで、マネジメント能力等、実践的な知の修得を促す。

平成 21 年度開催実績

魔法の宅急便原作者 角野栄子氏による特別講演(12月1日)

サクラダファミリア教会主任彫刻家 外尾悦郎氏による特別講演(12月19日)

日本感性工学会との共催で「感性とデザイン」シンポジウムを開催(3月3日)

平成 22 年度開催実績

「第1回子どもホスピスを考えるミニフォーラム 2010」を開催(7月25日)

「宮沢賢治展」(感性の場としての実験的展示)を開催(10月1日～30日)

サクラダファミリア教会主任彫刻家 外尾悦郎氏による特別講演(11月24日)

「第2回福岡子どもホスピスフォーラム」を開催(3月13日)

平成 24 年度開催実績

「庄内傘福研究会」主催・酒田市共催、市民シンポジウム「伝えよう未来へーみんなの傘福ー」における記念講演、坂元一光「伝統の創造と地域学ー平成傘福物語ー」を実施(2月2日)

平成 25 年度開催実績

百学連環 BAR でトム・ヴィンセント氏(トノループ・ネットワークス代表)を招いて特別講演会を実施(4月6日)

百学連環 BAR で斉藤政雄((株)斉藤政雄建築事務所顧問)を招いて特別講演会を実施(5月19日)

百学連環 BAR で関根健次(ユナイテッドピープル(株)代表取締役)を招いて特別講演会を実施(6月16日)

百学連環 BAR でヤマウチマサヒロ(PRODUCTS NINE PER ONE)を招いて特別講演会を実施(7月28日)

百学連環 BAR で堀尾茂雅(墨人庵主宰、書道家)を招いて特別講演会を実施(11月24日)

百学連環 BAR でジェフリー・アイリッシュ氏(民俗学者)を招いて特別講演会を実施(1月19日)

「LIFE×LIVE 筋ジストロフィーと共に生きる」(10月14日)

「紺屋 2023 アーカイブ展 “Mile-age” 」でのパネルトーク、池田美奈子「プロジェクトをアーカイブすること」を開催(11月15日)

「ヘレンダグラスハウスの歩みとその物語」子どもホスピスの創設者シスター・フランシス・ドミニカ氏講演(11月29日)

柳川ひな祭り実行委員会・柳川市開催、さげもんめぐり 20 周年「おもてなしシンポジウム」における記念講演、坂元一光「さげもんに託す地域の明日ー伝統をつくり、めでる、つなぐー」を開催(1月19日)

本学府では、これは、各専攻の特色を活かしつつ学府及び各専攻の教育目的に沿った独自の教育研究活動を展開するためであるが、学府の教育目的に謳う「科学的な知の統合と創造」を図るためのプロセスやその仕組みについては、学問体系としては必ずしも学生に教授していなかった。このため、本学府の教育目的に叶う人材を養成するため、平成 22 年度に、学府共通科目として修士課程 1 年次を対象に「科学の統合方法論」(必修科目；1 単位)を新たに開講することとした。

本科目の目的や講義内容は資料 2-1-E に示すとおりであるが、本科目を履修することにより、学生は、「知の統合と創造」を図るための科学的探求の仕組みとそのプロセスや、異なる科学的探究の方法や知の転換及び統合について理解し修得することができる。また、本科目において一部演習形式を取り入れることにより、各専攻の学生が交流し協働する環境をも整えることができ、専門分野が異なる学生間の知の交流をも図ることができる。

平成 24 年度末に全専攻の修士課程で完成年度を迎えたことから、学府共通科目「科学の統

合方法論」のあり方を検討するため、あり方検討委員会を立ち上げた。検討を重ねた結果、学府共通科目を「統合新領域最先端セミナー」とし、平成25年10月入学者から受講することとした。

資料2-1-E 学府共通科目「科学の統合方法論」／「統合新領域最先端セミナー」

講義の目的	<p>本学府は複合的で学際的な新領域の課題を解決するため、細分化された専門的な知を統合し新たな科学を創成することを目的として設置されており、各専攻ともに文理両棲の科目によって編成されている。このことを踏まえて科学的知の研究手法や知の統合のあり方について理解しておくことは重要である。そのためにここでは、科学的探求の仕組みとそのプロセスや、異なる科学的探究の方法や知の転換および統合について理解し修得することを目指す。</p>
講義の内容	<p>「科学の統合方法論」（平成21年4月入学者から平成25年4月入学者） 科学的探究の思想とステップは専門領域を問わず共通する点が多いが、具体的な研究手法は各領域で異なる。そこで、それぞれの研究方法について理解をして、知の統合と新たな知を創造する方法を学ぶ。まず、ユーザー感性学におけるヒトの感覚・情動研究の方法論（実験計画法、測定法など）や研究事例、また人間理解のための研究方法である観察法について体験的理解を深める。続いて自動車を対象にして、科学的な知の発想とそれを活かす知の具象化に至る一連の知の応用と転換のプロセス、さらに知の可視化とその管理（知財管理）を学ぶ。</p> <p>※平成23年度以降は、新たにライブラリーサイエンス専攻が本学府に設置されたため、以下の講義内容となった。</p> <p>科学的探究の思想とステップは専門領域を問わず共通する点が多いが、具体的な研究手法は各領域で異なる。そこで、それぞれの研究方法について理解をして、知の統合と新たな知を創造する方法を学ぶ。まず、ユーザー感性学専攻におけるヒトの感覚・情動研究の方法論（実験計画法、測定法など）や研究事例、また人間理解のための研究方法である観察法について体験的理解を深める。続いて自動車を対象にして、科学的な知の発想とそれを活かす知の具象化に至る一連の知の応用と転換のプロセス、さらに知の可視化とその管理（知財管理）を学び、<u>最後に知の統合に必要なテキスト情報の管理と提供のあり方について考察する。</u></p> <p>「統合新領域最先端セミナー」（平成25年10月入学者から） ※平成25年4月に「科学の統合方法論」のあり方を検討するため、あり方検討委員会を立ち上げ、検討を重ねた結果、学府共通科目を「統合新領域最先端セミナー」とし、平成25年10月入学者から受講することとし、以下の講義内容となった。</p> <p>統合新領域を構成する3つの専攻の教員が、自身が研究を行っている分野の最先端領域について講義する。学生は自分の所属する専攻だけでなく、他専攻教員の講義も受講することにより、様々な研究分野における知の統合や創造の事例を学習する。講義で紹介される各分野における方法論や現状、将来展望等を学ぶことによって、学生は自らが「科学的な知の統合と創造」を行うための基礎を養成する。</p>

観点 学生や社会からの要請への対応

(観点に係る状況)

本学府ユーザー感性学専攻の設置にあたっては、時代の要請に適合した教育課程を編成するため、先ず産業界や自治体を始めとする多方面のニーズ調査（資料2-2-A）を行った。

資料2-2-A ニーズ調査の結果

	調査概要	調査結果
ユーザー感性学専攻	<p>[対象機関]</p> <p>①地元の民間企業 TOTO、電通九州、JR九州、リクルート九州支社</p> <p>②経済団体 福岡県中小企業経営者協会、福岡ベンチャーシステム研究会</p> <p>③コンサルタント会社 ビジネスカウセラー桑原英治事務所</p> <p>④人材育成機関 九州アジア経営塾、博多織ディベロップメントカレッジ</p> <p>⑤地方自治体 福岡県、福岡市</p> <p>[実施時期] 平成19年6月～7月</p> <p>[実施方法] 対象機関を訪問し、面接形式によるヒアリングを実施した</p>	<p>【感性】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これからのものづくりには「感性」や「心」の部分が大事。 ・若い人は「肌」で感じることを知らず、線が細くなっている。 ・「伝統」の価値を理解し、説明できる人間が少なくなった。 ・大人になっても有効な感性教育プログラムを期待している。 <p>【教養】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企業人も目先の成果主義で大局観を失っている。 ・企業は学業にプラスαする人間力をもった人材を求めている。 <p>【教育プログラム】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学教員の従来型の講義の寄せ集めでは実践型とはならない。 ・「学びについて学ぶ」「学びのセンスを磨く」ことが大切。 ・実習/現場演習で「原体験」をつかませることができれば効果大。 ・やりがいや達成感、学びの楽しさを体得するプログラムにすべき。 <p>【表現力・対話力・共感力】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「身体でわかる」「肌で感じる」能力が企業現場にも求められるようになった。 ・職員資質として市民本位とコミュニケーション力を求めるようになった。 <p>【発想力・構想力】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「現場にふれる」「地域から学ぶ」ことがますます重要になった。 ・経営はサイエンスでありアートである。 <p>【チーム協働力】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・場のマネジメント能力が重要。 ・ダイバーシティー（多様性）への対応力があるかどうか。 ・関係性を創り出す能力があるかどうか。 ・異分野を人的につなぐことのできる人材。 <p>【実践力】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自らの学びとして何をつかんできたかが重要。 ・自らの守備範囲を超えた課題にどう立ち向かうかが大きな課題。

資料2-2-Aに示されるとおり、本専攻では、これまでの専門知識に加えて表現力・対話力・共感力・発想力・構想力・チーム協働力・実践力といった総合的な力が求められており、社会が求める人材像の中核として、豊かな「感性」や「教養」が重要視されてきている。

このため、本専攻ではこれらのニーズを十分に踏まえ、①教育内容、②指導体制、及び③就

学環境の向上に反映させるなど、特徴的な教育体制を編成している（資料2-2-B）。

資料2-2-B 社会からの要請等に応じた教育課程

① 教育内容

社会のニーズ (資料2-2-A)	対応科目	概要
<ul style="list-style-type: none"> ・肌で感じることを知らない ・従来型の講義の寄せ集めでは実践型とはならない ・実習/現場演習で原体験をつかませることができれば効果大 ・やりがいや達成感、学びの楽しさを体得するプログラムにすべき ・身体でわかる、肌で感じる能力が企業現場にも求められるようになった。 ・現場にふれる、地域から学ぶ重要性 ・場のマネジメント能力が重要 	ユーザー感性学 PTL	<p>3コースに関連する生きた演習プログラムで、社会現場の課題にリアルタイムに取り組み、表現力・対話力・共感力・発想力・構想力・チーム協働力・実践力といった総合的な能力を高度に実践的に習得する。平成21年度の具体的なテーマは以下のとおり。</p> <p>【感性科学コース】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・西鉄バス那の津営業所仮眠室・休憩室改善のための調査 <p>【感性コミュニケーションコース】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・絵本カーニバルの企画運営 ・アトリエHプロジェクト ・病院に居る子どもの環境設置に関する研究 <p>【感性価値クリエーションコース】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・唐泊地区ブランディング ・イグサ商品ブランド形成 ・九州の河川環境向上に向けてのデザイン提案 ・アーバンツーリズム（福岡・釜山における両都市ガイドブック作成）

②指導体制

社会のニーズ (資料2-2-A)	対応	概要
<ul style="list-style-type: none"> ・ダイバーシティー（多様性）への対応力 ・関係性を創り出す能力 ・自らの守備範囲を超えた課題にどう立ち向かうか 	修士論文中間発表会の導入	各コースにおいて、修士論文中間発表会を年2回開催し、個別の研究指導がより充実した。

③就学環境の向上

社会のニーズ (資料2-2-A)	対応	概要
<ul style="list-style-type: none"> ・身体でわかる、肌で感じる能力が企業現場にも求められるようになった。 	長期履修制度による社会人就学の支援体制	特にユーザー感性学専攻においては、現に職を有する社会人が、より高度な実践的な専門知識等を修得するために本専攻に就学するケースが多い。このため、本学府において「長期履修制度」を整備し、職を有しながら確実に就学・修了できる環境を整備している。ユーザー感性学専攻に在籍する社会人学生のうち、平成21年度は12名中3名、平成22年度は9名中3名、平

		成23年度は13名中6名、平成24年度12名中8名、平成25年度は23名中6名が本制度を利用している。
--	--	---

さらに、本専攻では、特定の専門事項について研究する研究生を資料2-2-Cのとおり受け入れている。その他、平成22年度においては、学府の授業科目のうち一又は複数を履修する科目等履修生2名を受け入れている。

資料2-2-C 研究生の在籍状況（各年度11月1日現在）

H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度
0	4	3	6	12

(2)分析項目に係る自己評価

本学府では、養成する人材像と学問分野・職業分野の特徴を踏まえて教育目的、修了要件及び学位を定めている。また、各専攻に特徴的な科目を設け、教育目的に沿った人材を養成できる履修プログラムを設けている。

なお、本学府が社会のニーズを調査した結果、現代社会が求める人材像として、これまでの専門知識に加え、表現力・対話力・共感力・発想力・構想力・チーム協働力・実践力といった総合的な能力を有した人材、実践的な専門性を体得した人材、が挙げられることが判明した。このため、本学府では、これらの社会ニーズに十分に応えるため、高度な専門知識を修得する講義科目のみならず、社会との連携により実践的な知識を修得する演習科目を充実させ、複眼的な視野を磨くための指導制度を導入した。

また、学府及び本専攻の教育目的を達成するために、平成22年度に新たな授業科目を開講するなど、開講科目の見直しを行うと共に、「学府共通科目」「専攻共通科目」「コース専門科目」の区分を設け体系的な教育課程を整備している。

分析項目Ⅲ 教育方法

(1) 観点ごとの分析

観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

(観点に係る状況)

本学府では、学府及び専攻の教育目的（前掲資料1-1-A）を達成するために、高度な専門的知識を教授するだけでなく、実践的な知識を修得するためのインターンシップやフィールドワークなど授業形態上の特色を取り入れながら（資料3-1-A、B）、本専攻における学問の特性を重視し、授業科目を資料3-1-Cのとおりバランスを考慮して配置している。

学生はこれらの科目を体系的に履修することにより、高度な専門知識を修得するだけでなく、実社会が抱える現実の課題に直面し、その課題を複眼的な視点で解決していく能力をも修得していく。

資料3-1-A 授業形態上の特色

	授業形態	特色
ユーザー感性学専攻	特別研究	<p>感性についての広い視野の下に、①自主的な課題設定、②課題解決のための仮説考察、③検証方法の決定、④これらの指導教員への説明等を行い、⑤知的能力やコミュニケーション能力等を高め、⑥論文、成果発表等により本専攻で涵養した能力を総合的に発揮していく。このため、主指導教員・副指導教員制度を導入している。平成21年度入学者の研究テーマ（例）は以下のとおりである。本専攻の教育課程における特徴を十分に活用した、文理両棲の性質を持つ研究テーマや実践的な研究テーマが多く見受けられる。</p> <p>[感性科学コース]</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本人の美意識を脳活動から解明 共感が生じる際の生理反応に関する研究 情動誘発時の生理反応の個人差に関する研究 幸せ、喜びという情動が免疫系に及ぼす影響 <p>[感性コミュニケーションコース]</p> <ul style="list-style-type: none"> 医療現場における絵本カーニバルに関する実践研究 教育を目的としたゲームソフトによる対人相互作用の促進に関する研究 廃材プロジェクトによる地域におけるアートとまちづくりの連結 ボードゲームによる障害を持つ子ども達と大人とのコミュニケーションの場の研究 <p>[感性価値クリエーションコース]</p> <ul style="list-style-type: none"> ミュージックシンセサイザーにおける新しいインターフェイスの提案ー感性コミュニケーションの視点からー 現代における”トキワ荘”の意義と役割ーイラストレーターのコミュニティ形成ー 数学及び数学教育における感性 ユーザーの感性に立脚した不動産ビジネスの研究開発 都心部フィットネス構想 子どもにおける構想力の自由さについて
	チーム演習	「ユーザー感性学PTL」で実施する授業形態。3つのコース（感性科学、感性コミュニケーション、感性価値クリエーション）に関連する生きた演習プログラムで、社会現場の課題にリアルタイムに取り組み表現

	力・対話力・共感力・発想力・構想力・チーム協働力・実践力といった総合的な能力を実践的に修得する（資料3-1-B）。
--	---

資料3-1-B① 「ユーザー感性学PTL」の実績

(平成21年度)

実施形態	<p>教員指導のもと少人数で構成されるチームを編成して、自治体や企業等が直面する課題に対し、具体的なテーマを設定して、自治体や企業等と連携しチームでその課題解決にあたる。本演習を通じ、学生は社会のニーズ把握→テーマ設定→プロジェクト推進→社会への提案という一連のプロセスを学ぶと共に、チームで実践的に推進し、知の体系化を図ることによって、社会性などの総合的な人間力の向上や職業的自立に必要な能力を養成する。</p>
テーマ例、連携先、演習内容	<ul style="list-style-type: none"> ・西鉄バス那の津営業所仮眠室・休憩室改善のための調査 [連携先：西鉄高速バス] 教員の指導のもと、学生が主体となって調査した現状を踏まえて企業側と協議した結果、「中長距離バス運転手の職場環境改善」をテーマとして設定した。その後、運転手に対するアンケート調査、聞き取り調査及び、仮眠室等の現地調査（温度・湿度・照度などの環境データ計測等）を行い、施設等のハード面、勤務に対する精神的な疲労（神経過敏、憂鬱）のソフト面から課題を抽出し、仮眠室等の環境改善及び運転手の勤務環境に関する課題解決に係る提案を行った。本学からの提案に対し、企業からは、当事者（運転手）以外からデータ等に基づく客観的な提案を受け、職場の環境改善等につなげることができ、非常に有意義であった旨の評価を得た。 ・唐泊地区ブランディング [連携先：福岡市漁業共同組合 唐泊支所、福岡県漁業管理課] 唐泊漁港をモデルに、ユーザーの視点にたった「港と漁業」のブランドづくりを行った。当初は、唐泊の「えびす牡蠣」のブランドづくりをテーマとして設定していたが、プロジェクト進行のなかで、牡蠣を育てている「ひと」や港の「文化」に力点をシフトし、最終提案は、漁師の生き方や人間的魅力に焦点をあてて、『唐泊漁師物語』を編集・制作（1万部を印刷）し、「カキ小屋」の期間中、小屋において配布され、好評を得た。本PTLがきっかけとなり、福岡県、福岡商工会議所、マスコミ、金融機関（日本政策投資銀行）などを巻き込むかたちで、平成22年1月末にニューヨークの有名レストランで開催された「FUKUOKAフェア」において、唐泊の魚が食材として利用されることとなり、国外への情報発信につなげていくことができた。フェアには、漁協支部長も参加し、海外の反応に直接ふれることで、唐泊地区活性化に大いに役立った。唐泊の漁協関係者からは、「大学のPTLとして取りあげられたことで、新しい視点で、漁業・漁港の魅力を取りあげてもらい、関係者の自信につながり、ブランドづくりについても勉強になった」との評価が得られた。また、福岡県の水産行政部局からは、「本PTLが海外でのマーケティング活動につながるなど、予想外の展開となり、水産行政としても新しい発想をつかむことができた」との評価が得られた。 ・イグサ商品ブランド形成 [連携先：(株)イケヒコ・コーポレーション、(株)添島勲商店、(株)トーシン、(株)サンエイト] 筑後地域（大木町、柳川市、大川市を中心とした4市3町）のい草メーカー地元有力企業4社に対して、商品ブランド開発の提案を行うことを目的に実施。商品開発のための前提条件整理として、①既存文献の研究、②各社の既存商品紹介を行い、各社のヒアリングを実施した。商品開発等を各社と検討し、商品開発提案書のプレゼンテーションを行った（2回実施（1回目：商品開発立案者による各社へのプレゼンテーション及び各担当からの評価、2回目：各担当からの評価を受けて修正案の提案））。提案内容等について連携先から以下の評価を受けた。 「今後も本PTLを継続したい」 「PTLという新しい手法は評価できる」 「社会人、学生といった多様な視点からの提案は高く評価する」 「学生（若者）や出身学部別の多様な視点から提案は非常に役立つ」 ・九州の河川環境向上に向けてのデザイン提案 [連携先：国土交通省九州地方整備局河川部、遠賀川河川事務所] 九州地区に所在する河川空間に着目し、河川空間が抱える課題を導きだし、各自が導き出した課題改善に向けたデザイン提案を行うことを目的に実施。遠賀川をケース

	<p>タディとして検討を行うために、遠賀川を訪れ、遠賀川河川事務所職員から事務所の取組を、遠賀川水辺館を拠点に活動を行うNPO団体から遠賀川における地域住民の取組について話を伺うとともに遠賀川の現状についてのフィールド調査を実施した。学生は、これらの経験に基づいて各自が課題・テーマ設定を行い、新たな河川環境についてのデザインを検討した。検討した提案内容については、遠賀川河川事務所及び九州地方整備局河川部職員らを対象に、学生が各自の提案をプレゼンテーションし、現場で活動をしている立場からの意見・感想をもらった。相手先からは、プレゼンテーションで以下のような意見・感想を得た。</p> <p>「現場にいる職員では発想出来ない提案を多くもらった」 「実現性の高い提案も多くあるように思う」 「今後も、このような機会を設けお互いに勉強できればと思う」 「ケースとした遠賀川河川事務所でもNPOの方々等を対象にぜひこのような会を設けてほしい」</p> <p>・アーバンツーリズム(福岡・釜山における両都市ガイドブック作成) [連携先：福岡市、釜山市] 福岡市・釜山市の共同事業「福岡・釜山超広域経済圏協力事業」の一つとして行われている両都市への観光客誘致促進事業「釜山-福岡アジアゲートウェイ 2011」の取組みの一環として、自治体と連携し、ガイドブックを作成した。ガイドブックを作成するにあたっては、掲載項目に関し、学生が利用者の視点から抽出・選択した福岡・釜山両市に係る項目を自治体に対してプレゼンを行うなど、企画段階から関わった。また、教員指導のもと、学生自身で取材、執筆、編集及びデザインを行い、ガイドブックを作り上げた。学生が、企画段階から出版に至るまでの一連の実務的な作業に携わることで、より実践的な知識を修得することが出来た。自治体からは、完成したガイドブックは行政が作成していた従来ものとは異なり、利用者(ユーザー)をより意識した内容・構成となっている点について、高い評価が得られた。また、学生が現地取材も試みたことで、国際的な相互理解が促進されたなど、国際交流の一助としての評価も得られた。</p>
<p>学生による評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分ひとりの思考には限りがある。人と交わり議論することで創造性が育まれる。 ・チームでものを進めることの難しさがわかった。 ・まちづくりが及ぼす住民への影響力の大きさと、成功した時の幸せの広がり方を実感した。 ・「伝える」ではなく、「伝わる」話し方をするのが大切であることを感じた。 ・自分の強み、弱みがわかった。 ・議論スキルの必要性を感じた。 ・課題の成果物に、自他ともに確かな達成感を味わうことができた。人のやる気と自信回復は、この達成感の積み重ねであると再認識した。 ・同じテーマに前期・後期と継続して取り組めないか。 ・前期PTLと後期PTLに「基礎編」「応用編」のような差異をもたせられないか。 ・負担が大きい(研究とのバランスに悩み)。 ・社会人と学部進学生との間に認識や取組姿勢のギャップがあるように感じられる ・成果を社会にどう着地させるのか。

資料3-1-B② 「ユーザー感性学PTL」の実績

(平成22年度)

<p>実施形態</p>	<p>教員指導のもと少人数で構成されるチームを編成して、自治体や企業等が直面する課題に対し、具体的なテーマを設定して、自治体や企業等と連携しチームでその課題解決にあたる。本演習を通じ、学生は社会のニーズ把握→テーマ設定→プロジェクト推進→社会への提案という一連のプロセスを学ぶと共に、チームで実践的に推進し、知の体系化を図ることによって、社会性などの総合的な人間力の向上や職業的自立に必要な能力を養成する。</p>
<p>テーマ例、連携</p>	<p>・南区プロジェクト[連携先：南区役所]</p>

<p>先、演習内容</p>	<p>大橋キャンパスの所在する南区におけるサインおよびストリートファニチャーに関する調査検討・デザイン提案を行った。履修者を4グループに分け大橋キャンパスを中心に南区を大きく4エリアに分類し、1グループ1エリアの担当を決め、現在設置されているサインやストリートファニチャーに関する現状調査を実施した。その後、現状調査の整理を行いグループ毎にエリア課題の抽出、エリアにおける南区らしい資源とは何かの抽出を行い、履修者全員で南区全エリアにおける情報共有を行った。</p> <p>情報共有後は、各自でテーマを設定し具体的なデザイン提案やサイン運営に関する企画提案等を検討し、提案書の作成を行った。学期末に南区役所において担当者に向け、プレゼンテーションを実施した。なお南区役所の担当者からは、プレゼンテーションで次のような意見・感想を得た。「実現が難しいというコスト的な問題がありそうだが、実現できそうな提案もいくつかあるので、今後プロトタイプを作成を行い区民の意見を求めたい」</p> <p>「今後も、このような機会を設けお互いに勉強できればと思う」</p> <p>・九州の河川環境改善に向けたデザイン提案[連携先：国土交通省九州地方整備局筑後川河川事務所]</p> <p>九州地区に所在する河川空間に着目し、河川空間が抱える課題を導きだし、各自が導き出した課題改善に向けたデザイン提案を行うことを目的とする。筑後川をケーススタディとして検討を行うために、筑後川を訪れ、筑後川河川事務所職員から事務所での主な取組を聞き、筑後川河川事務所周辺の筑後川沿い約3kmを事務所職員と一緒に歩き、護岸整備後の課題や河川敷に繁殖する樹木の問題、河川標識設置における大きさや色の検討の経緯等についての話聞き、質疑を行った。この経験に基づいて筑後川の現状や河川が抱えている課題を把握した学生は、各自で課題・テーマ設定を行い、新たな河川環境についてのデザインを検討した。検討した提案内容については、筑後川河川事務所において学期末にプレゼンテーションを行い、現場で活動をしている立場からの意見・感想をもらった。</p> <p>なお事務所担当者からは、プレゼンテーションで次のような意見・感想を得た。「現場にいる職員では発想出来ない提案を多くもらった」「実現性の高い提案も多くあるように思う」「地域の小学生を巻き込む等具体化したい提案については、事務所内で検討させてほしい」「他の職員にもこれらのプレゼンテーションを回覧したい」</p> <p>・子どもホスピスプロジェクト（子どもの病気やいのちについて考え、子どもホスピスが社会に受け入れられる土壌をつくるためのアクションリサーチ）[連携先：医療法人小さな診療所]</p> <p>医療法人小さな診療所の京極医師の協力のもと、在宅療養している難病をもつ子ども（キャリアオーバー含）15例に対して、ニーズ把握のため事前訪問を行い、訪問した数名の院生とともに、ニーズを検討し、PTLで関わっていく事例について抽出した（7例）。7例（幼児3名、青年4名）について、メンバーで共有し、1例につき、1～数名の担当者を決め、在宅療養している子どもの生活の質を高める工夫を考え、定期的（または不定期）に交流を開始した。内容は、家庭訪問による遊びの提供、カラオケで誕生日会、散歩、自宅でのクリスマス会などである。関わりの内容は毎回訪問記録を記載し、PTLの際に報告し、意見交換していった。社会への発信として、事例の関わり内容を含めて、フォーラムを開催した。（H23.3.13 医学部百周年記念講堂、参加者150名、読売新聞、朝日新聞、西日本新聞掲載）。フォーラムは第1部で子どもホスピスの紹介、2部では、7例への訪問や交流の実際を様々なスタイルで発表した。3部では本音トークと題して、会場とのディスカッションを行った。会場には、子どもホスピスの内容を伝えるべく作成した15枚のポスターや子どもや青年達との関わりについてもパネルを展示し、多くの参加者から高い評価を得た。</p> <p>・キャナルシティ「スターチャート」プロジェクト[連携先(株)福岡リアルティ]</p> <p>キャナルシティ博多を保有・管理する(株)福岡リアルティと共同で、福岡を訪れる外国人観光客の回遊を促し、消費活動をより主体的に楽しんでいただくための一つの方法論を開発し、その効果を現実の商業空間（キャナルシティ博多）において1ヶ月間にわたり実施・検証した。具体的には、「温泉」「博多美人」「おみやげ」という物語に沿った館内商品を星に見立て、それらの組合せを、ストーリーを持つ一つの星座（スターチャート）として提案することで、個物・個店を単位とする従来マーケティ</p>
---------------	--

	<p>ングにない視点で、大型商業空間に体験消費型の新しい魅力づけを行っていった。東日本震災の影響を受けたなかでの実施となったが、有意義な実証データをとることができ、今後とも複合大型商業施設において、外国人観光客のみならず国内顧客を含め、来街者の動機づけを行い、行動をデザインして行く際に大いに参考になるとの評価を(株)福岡リアルティの関係者、現場スタッフの方々からいただいた。23年度(後期)は、それをさらに発展させたPTL演習を、同じく、(株)福岡リアルティと共同でキャナルシティ博多において行う予定である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・脳卒中回復期のリハビリ病棟における自由時間の使い方とその意義 [連携先：長尾病院] 脳卒中回復期の入院患者はリハビリ訓練以外の多くの時間を病院内で過ごす。この訓練以外の時間をどのように過ごすかが患者のQOLに大きく関わり、リハビリ訓練の効果にも影響する可能性がある。本PTLでは自由時間に患者がベッドに長時間横にならないように、積極的な離床を促すための対策を検討した。具体的には、1)入院環境の改善のための調査、2)患者の1日の行動量の調査、3)ゲームをリハビリに用いるための調査研究、4)離床を促すポスター作りなどを実施した。これらの調査は、患者の離床への動機づけを高めたと同時に、病院スタッフの離床に対する意識の改革にもつながった。
<p>学生による評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・企画・運営した結果に手応えを感じた。 ・子どもたちの置かれた現状を知り、医療者でない自分達にも病気や障がいのある子どもと関わることができることを学んだ。 ・フォーラムの社会的意義や参加者の反応に、大変だったけど充実感が大きかった。 ・実際の商業施設での演習はプロスタッフとの共同ということでもあり、大いに緊張したが、達成感があり、実践知として得るものが多かった。 ・これまで顧客として来ていたキャナルシティを内側から見ることができ、多角的な視点の重要性を学ぶことができた。 ・「スターチャート」という新しいマーケティングの方法を提案できて嬉しい。 ・地元企業にも、オープンでアクティブな発想をされる方がおられることをしり、就職活動の参考になしていきたい。

資料3-1-B③ 「ユーザー感性学PTL」の実績

(平成23年度)

<p>実施形態</p>	<p>教員指導のもと少人数で構成されるチームを編成して、自治体や企業等が直面する課題に対し、具体的なテーマを設定して、自治体や企業等と連携しチームでその課題解決にあたる。本演習を通じ、学生は社会のニーズ把握→テーマ設定→プロジェクト推進→社会への提案という一連のプロセスを学ぶと共に、チームで実践的に推進し、知の体系化を図ることによって、社会性などの総合的な人間力の向上や職業的自立に必要な能力を養成する。</p>
<p>テーマ例、連携先、演習内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・リハビリ環境の改善プロジェクト[連携先 長尾病院] 教育や医療を主目的とするゲームをシリアスゲームと呼び、社会の注目が高まっている。しかし、開発されたゲームの効果については十分な評価が行われていないのが現状である。本PTLでは、福岡市・九州大学・長尾病院が連携して開発したリハビリ訓練用シリアスゲームの効果を感じ科学的なアプローチで評価することを目的とした。大学生を対象に、シリアスゲームを使ってリハビリ訓練（起立着席運動）を行った場合と、ゲームを使わずに訓練を行った場合で、生理及び心理負荷の比較を行った。その結果、シリアスゲームの使用は、訓練の効果（身体的な負荷）を妨げることなく、心理的にネガティブな感情を抑える効果があることがわかった。本研究は、長尾病院で成果発表を行った後、学術的な学会でも発表を行った。 ・科学コミュニケーション&ミュージアムコミュニケーション 研究する人に必要な科学コミュニケーション基盤を、実践をとおして習得します。ワールドカフェによる対話やワーク、企画実践をとおしたチーム演習です。学内外でサイエンスカフェや催事実施し、チーム毎に決めた課題に基づき、実践内容や参加者を分析します。演習をとおして、学術的な報告書や研究費の申請書の書き方の習得も目指します。 平成23年度は、まず個々人でサイエンスカフェやワークショップの企画を考え、チー

ム内で相互に講評しあい、企画案の校正を繰り返した後、合同で実施しました。放射能拡散や環境など現在の課題に関わるサイエンスカフェを2件、九大百周年記念事業としての子ども向けワークショップを実施しました。

・観光まちづくり九州における観光地（地域）の分析と観光客誘致に向けた提案

JTB九州とのコラボ企画。九州における観光地・地域の現状を把握しハード面、ソフト面の両面から旅行者の観光地への期待と実際に訪れての印象についての調査、分析を行い観光客誘致に向けたデザイン（ハードでもソフトでも可）企画・提案を行う。

・「感動コレクション」プロジェクト

人は必ずしも合理的とはいえない行動をする。人が動くとき、人を動かすときの真の原動力は「理屈」ではなくて「感動」なのではないか。本プロジェクトは、民俗学、文化人類学の手法を援用して、世の中にあるさまざまな「感動」のエピソードやストーリーを収集・分類・分析・編集しながら「感動」の構造を探り、それを第三者に伝えることを目指す。最終的な結果は、書籍、展示、朗読会などのかたちで発表する。

・「ガウディ未来学」探求プロジェクト

アントニオ・ガウディという一人の建築家とガウディ作品を彫り続ける外尾悦郎という一人の彫刻家。この二人の作品と言葉を道標に「人間のオリジン（根源）に立ち還って思考し、デザインし、行動していく」ことを探求していくプロジェクト。サグラダ・ファミリア教会の外尾氏とともに、ポスト”3.11”を視野に入れ、これからの幸福像や都市像を「ガウディ未来学」として構想し、行動する知のネットワーク「ガウディ未来建求網」を模索していく。

・ハコザキに「声」と「響き」を届ける

九州大学箱崎キャンパスやその周辺のコミュニティに「語りの場」や「響きの場」を企画するプロジェクト。箱崎地区のアートスポットを舞台としたトークイベント「ハコザキ・ボイス」や「宮崎現代音楽祭」を企画・運営することによって、語りや音楽という表現行為がコミュニティをどのように活性化させ、土地が持つ固有性にあらたな価値を与える有用性もちうるかという実験の現場ともなっている。

・子どもホスピスプロジェクト

子どもの病気やいのちについて考え、子どもホスピスが社会に受け入れられる土壌をつくるためのプロジェクト。

前期：昨年度より関わっている在宅療養をしている子どもや青年達との関わりをとおして、子どもと家族のQOL (Quality of Life) について検討し、病気や障害があっても豊かに生活できる仕組みを考える。社会への啓発・情報発信としてフォーラム（展示会）公開ディスカッションの企画・実施を行った。

後期：難病の青年とともに「余命を知って生きるということ」の公開ディスカッション、UAP ふくろうの会の協力を得て難病の子どもとご家族を対象に「キラキラワークショップ」を企画実施した。

・物語論「物語を読む、語る、つくる、批評する。物語の中に子どもを探す」

人間にとって物語とは何か。物語とは、個人や集団が身を以て体験したことを語る唯一の方法であり、物語という方法でしか伝えられないことがある。私たちは、物語とどのように出会い、その構造をどのように理解しているのか。過去・現在・未来の物語を読み、他者に向けて肉声で物語を語り、想像力を飛翔させて物語をつくり、誠実に物語を批評してみる。「物語を読む、語る、つくる、批評する。物語の中に子どもを探す」という試みです。

・災害復興+design：復興の先にある日本の未来をデザインしよう

これから震災復興に取り組む都市が、今度どのような都市（地域ブランド）を目指すのか、そんなビジョンを描き、その将来ビジョン実現のためのデザイン提案を行なう。サブテーマ①住宅・まちづくり②教育・福祉③産業にフォーカスしチームで取り組む。最終的には10月～11月の「震災復興+design COMPETITION」への応募を目的とする。

・「スタイルノート」プロジェクト

福岡市と釜山市が中心となって推進している「アジアゲートウェイ 2011」からの依頼プロジェクト。本学と釜山の東西大学校とのコラボレーションによって、福岡市と釜山市それぞれのライフスタイルを紹介するガイドブックを企画、編集、出版している。3年間のプロジェクトで、すでに3号の出版を行っている。今期は、電子ブックも視野に入れた、プロジェクトの総集編の出版を目指す。

・“INORI”商品開発プロジェクト

障害福祉サービス事業所「工房まる」と博多織織元「サヌイ織物」のコラボプロジェクト“INORI”の商品企画（第二弾）に参画し、企画・デザイン・販売という一連の価値創造プロセスを実践していきます。第一弾商品は、昨年度の小阪先生の集中講義「感

	性マーケティング論」のフィールド演習でも取り上げていただきました。“INORI”には、「いのち」「織り」「祈り」がこめられています。売り上げの5%は絶滅が危惧されている野生生物の保護活動に寄付されます。福祉と伝統工芸と環境保護をつなぎ、すべての存在を認め合う世界への祈りを込めた商品の開発を経験する又とない機会です。最大5名ということで履修希望者を募ります。
学生による評価	実際の障害児とふれ合うことができ、普段には経験できないことが経験できた。 アウトプットの決まっていない課題に取り組めた 博多織の良さ、美しさに改めて触れることができた。特に工場見学をさせてもらった時には、普段の授業なら味わえない良さを実感することができた。また今回のPTLでは、サヌイさん、デザイナーさん、工房〇の方々が協働していたので各々の方の仕事に対するこだわりや姿勢を間近で見ることができ、1つの商品を開発していくことはどういうことか体感できた。

資料3-1-B④ 「ユーザー感性学PTL」の実績

(平成24年度)

実施形態	教員指導のもと少人数で構成されるチームを編成して、自治体や企業等が直面する課題に対し、具体的なテーマを設定して、自治体や企業等と連携しチームでその課題解決にあたる。本演習を通じ、学生は社会のニーズ把握→テーマ設定→プロジェクト推進→社会への提案という一連のプロセスを学ぶと共に、チームで実践的に推進し、知の体系化を図ることによって、社会性などの総合的な人間力の向上や職業的自立に必要な能力を養成する。
テーマ例、連携先、演習内容	<ul style="list-style-type: none"> ・事象関連電位による音評価 自動車メーカーとの共同研究として、自動車のドア閉開音の印象に関連する評価実験(主観評価、生理実験等)を行い、生理学的・心理学的手法を用いた、感性的に付加価値の高い製品開発に関わる研究を実践する。 ・子どもホスピスプロジェクト vol15 子どものいのちについて考え、病気や障がいをもつ子どもとその家族のトータルケアとしての子どもホスピスが社会に受け入れられるためのプロジェクトの一環。重い病気や障がいのある子どもとその家族に還元できる企画を実施する。具体的内容は、参加メンバーにより決定する。(vol1~4:フォーラムの企画・実施、病児との訪問交流、展示、ディスカッション企画「余命を知って生きるということ」、万華鏡ワークショップ等) ・ミュージアム・コミュニケーションー思いと記憶を形にするー ミュージアムという「場」や「装置」を基軸としたプロジェクト。ユーザーとしての来場者の視点を重視し、ワークショップ、サイエンスカフェ、展示等を企画・実践し、評価までを行います。平成24年度は、ポスト九大百周年としての九大博物館特別企画「ミライニツムグ」の一環として企画等を実施し、その実践をとおして今とこれからの価値観や生き方を考えつつ、人の思いや場の記憶を形にすることに挑戦します。 ・自由発想ラボをつくる UKS本館1階・2階のスペース(かつて実験室であった)を自由発想ラボとして再生し、活用法を開発していくプロジェクトです。創造性、イノベーションの扉を開くには、自由な発想を触発する「よき場」の創出が必要です。リアルに感性を刺激し、野生の思考を促していく、原っぱのような場。そこでは、言語や論理を重ねることより、素材にふれたり、プロトタイプを組み立てたり、五感や身体感覚をフル活用しながらの試行錯誤やひらめき、他者との共感・共鳴が重要になってきます。具体的なテーマをもとに、知識の囲い込みを乗り越えていく「よき場」を実践し、体感していきます。あわせて、KJ法を編み出した川喜田二郎さんの『ひろばの創造』や清水博さんの『生命知としての場の論理』などの本にもふれていきたいと思えます。 ・将来のモビリティのcockピットとは？ 某自動車メーカーとのコラボレーションにより将来(10年先くらい)のモビリティのcockピットの在り方について検討する。我々の将来のモビリティライフが物質的・精神的に豊かになるには？を念頭に柔軟な発想を募ります。 ・唐津・地域ブランディングプロジェクト 唐津市との共同研究による地域資源を活かす地域ブランディングプロジェクト。唐津市

	<p>の地域資源を網羅的に収集し、それを整理、編集し、ブランディング戦略につなげます。今学期は、現在収集中の地域資源をブラッシュアップし、そこからブランドコンセプトを導き出し、最終的には、ブランド戦略立案のためのコンセプトブックを制作し、市役所や商工会議所等にプレゼンテーションします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スタイルノートプロジェクト 福岡市と釜山市が中心となって推進している「アジアゲートウェイ」からの委託プロジェクト。本学と釜山の東西大学校とのコラボレーションによって、福岡市と釜山市それぞれのライフスタイルを紹介するガイドブックを企画、編集、出版しています。過去3年間で、すでに3号の出版を行い、第4号が進行中です。今学期は、全4号のコンテンツをもとに総集編を編集し、紙媒体の書籍と電子書籍の同時出版に取り組みます。 ・高齢者+design ～高齢者50%社会のためにデザインは何が可能か。～ 最終的に神戸市との連携を視野に入れて具体的な今日本の都市行政が抱える高齢者に対する課題を解決するデザイン提案を前・後期を通じて行います。前期・後期単独履修も可能です。前期のテーマは課題に対するデザインアイデアの開発、後期は具体化へのプロジェクトと最終提案を行います。日本の都市における高齢者問題に対してさまざまな課題を加え、それを具体的な実現可能なデザインとして社会に提案し、解決して行こうと目指すプロジェクトです。去年は「災害復興+design：復興の先にある日本の未来をデザインしよう」というテーマで行い「震災復興+design COMPETITION」に応募して発表を行いました。今年最終的には神戸市への行政を含プレゼンテーションも予定している。 ・ハコザキに「声」と「響き」とどける 箱崎という「土地の感覚」や「土地の記憶」に着目して、箱崎キャンパスやその周辺に「語りの場」や「響きの場」を企画。さらに、大学と周辺のコミュニティを「声」や「音」でつなげる試み。具体的には「箱崎千年現代音楽祭」や「リベラルアーツ講座」の運営に関わりながら、最終的に箱崎を舞台にしてイベントを企画立案し、実施する。 ・焼酎文化のリ・デザイン提案 自由発想ラボをめざすUKS本館1階・2階のスペース（一部）が「アイデア特区」としてスタートしました。思考を既存の常識や枠組みから解放し、新たなイメージとカタチを探求していく“はらっぱ”のような空間です。そのアイデア特区において、「酒（焼酎）」の新しいありかたを先般焼酎ブームの仕掛け人である（株）ルネサンス・プロジェクトと共同で研究していきます。めざすは、焼酎そのものではなく、焼酎の新しい文化やライフスタイルの提案・創造です。古来、神事や祭祀、儀礼になくはない存在であった「酒」。その原点に立ち還り、「礼」の精神を尊び、願をかけ、契をかわすためのシンボリックな存在として、焼酎のリ・デザインを探求していきます。いい提案としてまとまり、九州発の「礼酒」として市場に送り出していくのが最終的な目標です。 ・自動車内の「香り」のあり方について 自動車内の「香り」を、その必要性や各自動車にふさわしい香りとはどういったものか？等について、みなさんの世代からの視点を大切に広く検討します。本テーマはトヨタ九州と共同での研究となります。
<p>学生による評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・創造的発想の得方を教えてもらっただけでなく、具現化する方法を示唆してくれた。 ・研究を進めていく上で、根幹部分の最も大切なものに気づきをいただき感謝しています。 ・言葉を綴ることの難しさ、大切さ、自分の中のものどう表現するのか、できるのかをいつも試されたので向上心がわいた。 ・企業との共同研究への参加ということで、普段の研究者側の意見だけでなく、企業側の意見（コスト、利益の話）を聞いて勉強になった。 ・専門領域についての知識が得られた。 ・将来役に立つと思った。 ・関連する領域に興味を持つようになった。 ・勉学に対する意欲がわいた。

資料3-1-B⑤ 「ユーザー感性学PTL」の実績

(平成25年度)

実施形態	<p>教員指導のもと少人数で構成されるチームを編成して、自治体や企業等が直面する課題に対し、具体的なテーマを設定して、自治体や企業等と連携しチームでその課題解決にあたる。本演習を通じ、学生は社会のニーズ把握→テーマ設定→プロジェクト推進→社会への提案という一連のプロセスを学ぶと共に、チームで実践的に推進し、知の体系化を図ることによって、社会性などの総合的な人間力の向上や職業的自立に必要な能力を養成する。</p>
テーマ例、連携先、演習内容	<ul style="list-style-type: none"> ・リハビリ訓練用ゲームの科学的評価プロジェクト 現在、産官学（福岡市、九大、リハビリ病院）の連携によってリハビリテーションの苦痛を和らげ、動機づけを維持することを目的としたゲームが開発されている。本PTLでは開発されたゲームの感性科学的な評価方法について検討し、その実践を試みる。 ・子どもホスピスプロジェクト vol16 子どものいのちについて考え、病気や障がいをもつ子どもとその家族のトータルケアとしての子どもホスピスが社会に受け入れられるためのプロジェクトの一環。 重い病気や障がいのある子どもとその家族に還元できる企画の運営、実施他。5月5日（企画予定）の実践評価を踏まえ、次の企画立案、実施。 ・ミュージアム・コミュニケーション ミュージアムという「場」や「装置」を基軸としたプロジェクト。ユーザーとしての来場者の視点を重視し、ワークショップ、サイエンスカフェ、展示等を企画・実践し、評価までを行います。今期は学外からキュレーターなどを招聘し、セミナーも実施します。 ・NPO法人「子どもの村福岡」の広報戦略づくり 「子どもの村福岡」は、年間予算1億4千万程の認定NPO法人です。昨年度には国際組織も立ち上がり、社会的養護の状況に置かれた子どもたちの支援に取り組んでいます。PTLでは、児童虐待の現状や里親等の社会的養護の仕組みを理解するとともに、本NPOの活動の在り方を捉えなおし、広報戦略づくりを行います。（C：NPO法人「子どもの村福岡」） ・九州電力「CSR報告書2013」のデザイン・ワークショップのマネジメント 九州電力では、毎年CSR報告書を作成していますが、この度、デザインをリニューアルすることになりました。その中で、ただデザイナーに依頼するのではなく、学生や一般の方々とワークショップを開催しながら、その方向性を取りまとめていきます。PTLでは、このワークショップのマネジメントと、報告書に対しての提言を行います。（C：九州電力） ・「SHO-CHU スタイル」の発信・展開 2012後期PTL「焼酎文化のリ・デザイン提案」を継続、発展させていきます。焼酎そのものではなく、焼酎の新しい文化やライフスタイルの提案という基本線は同じです。前期PTLで「焼酎」を「SHO-CHU」と表記・発音すれば、中国語では「かわいいキッス」という意味になるという発見がありました。 ・紺屋2023アーカイブ展プロジェクト 11月から1ヶ月間の予定で開催する展覧会「紺屋アーカイブ展」の企画、制作プロジェクトです。「足跡と思考のアーカイブ：“これまで”と”今”と”これから”の編集」をコンセプトに、紺屋2023の5年間の活動記録をベースに、普遍的な問題提起をします。作業内容は、大きく4つに分類されますので、少なくともどれか1つについて強い関心とモチベーションのある人の参加を期待します。 ・九州らしさと車 TOYOTA九州との共同で、九州らしさとは何か？を検討し、九州らしさを車で表現するための企画・提案を行います。九州のイメージを具体化し、九州を想起させるための方法の検討、デザイン提案までを実施します。 ・issue+design プロジェクト 認知症の早期発見・受診促進のためにデザインは何か可能か。 過去には「痴呆症」と呼ばれていた病。未だに偏見や誤解が多く、家族や本人が認めたくない、周りの人に隠したがる、病院に行きたがらず、早期発見・受診の大きな障害になっています。認知症とは加齢に伴い罹患する可能性が高まり、高齢者（65歳以上）の10%程度が発症するごく普通の「病気」であること、早期に発見することで進行を止めることができること、患者個人の考えや希望に応じたケアが可能であることなど、必要な知識を伝え、誤解をなくし、早期発見・受診につなげるためのアイデアを考えていきます。 ・光をキーワードとした健康支援技術の評価・提案プロジェクト

	<p>光の生理作用の解明が進み、光の健康利用や光の健康リスクを低減するための製品やアイデアが提案されている。本 PTL ではこれらの提案の科学的根拠や妥当性について検証し、さらなるアイデア提案につなげることを目的とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもホスピスプロジェクト vol 7 子どものいのちについて考え、病気や障がいをもつ子どもとその家族のトータルケアとしての子どもホスピスが社会に受け入れられるためのプロジェクトの一環。重い病気や障がいのある子どもとその家族に還元できる企画の運営、実施他。10 月 14 日（企画予定）の実践評価を踏まえ、次の企画立案、実施。 ・コンサートの企画と実践 九大・大橋キャンパスの多次元ホールでのコンサートシリーズの制作実践を行ないます。コンサートの企画、制作、広報などを通して社会との連携を体験するのが目的です。なお、コンサートは、2014 年 1-2 月にかけて実施する予定です。 ・伝統へ・伝統から — 焼酎 BOOK/承天寺 BOOK の作成 — 焼酎と承天寺という相異なるテーマに平行して取り組みます。焼酎は 2013 前期に取り組んだ「Sho-Chu プロジェクト」の発展として KURAMOTO BOOK を作成します。ものづくりへのこだわりとそこに携わっておられる杜氏など人間像を紹介していきます。一方の承天寺は博多山笠、博多織、うどん・そば・饅頭が発祥した、博多の歴史の原点・原器のようなお寺（禅寺）です。JOTENJI BOOK では、承天寺の 700 年の歴史に学び、博多の祭り、文化、産業、まちづくりのなかで承天寺の果たしてきた足跡をたどっていきます。2 つの BOOK 作成に共通するのは「伝統へのまなざし回帰・伝統からの価値創造」という視点です。資本主義の競争・交換ルールのみ縛られない社会のあり方を探求し、「贈与」や「循環」の意義を考え直す契機にしたいと思います。PTL としては 2 系列のプロジェクトが走り、履修者は希望するどちらか一方の BOOK 作成に取り組むかたちで進めていきます。
<p>学生による評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・なかなか難しい。でも楽しいです。でもテープ起こしが大変です。 ・講義テーマに興味が高まりました。 ・専門領域についての知識が得られた。 ・将来役に立つと思った。 ・関連する領域に興味を持つようになった。 ・勉学に対する意欲がわいた。

資料 3-1-C 学府教育科目の授業形態別配置数

平成 21 年度				平成 22 年度				平成 23 年度				平成 24 年度				平成 25 年度			
講義	演習	実験・実習	合計	講義	演習	実験・実習	合計	講義	演習	実験・実習	合計	講義	演習	実験・実習	合計	講義	演習	実験・実習	合計
34	8	7	49	35	8	7	50	35	8	11	54	34	8	11	53	34	7	11	52

担当授業科目に関しては、教授・准教授は主要授業科目を含めた科目を、講師・非常勤講師は主要授業科目以外の科目を担当している。本専攻では、「感性」という学問分野に対して、学際的かつ多面的な教育研究活動を展開し、「科学的な知の統合と創造」に取り組んでいくために、専任教員の他、専門領域が重なる学内教員や国公立大学連携及び産学官連携に基づいた学外教員からなる教員組織を編成している（前掲資料 1-1-F）。

本専攻のシラバスは資料 3-1-D に示すとおり作成しており、学内から閲覧可能なホームページ上で公開している。

資料3-1-D シラバス (例)

授業科目区分	専攻共通科目 (ユーザー感性学基礎)	授業対象学生	1年次 選択	
授業科目名	感性科学概論			
講義題目				
授業方法及び開講学期等	前期 月曜日 3時限	単位数	2単位	
通常授業・集中講義・臨時	通常授業			
担当教員 綿貫茂喜、森周司、樋口重和、金亮奎 watanuki@design.kyushu-u.ac.jp	履修条件 当概論は感性科学コースに所属する学生は必ず受講すること。また、他コースの学生であっても、感性を理解する基礎科目であるため、履修することが望ましい。			
授業の概要 感性科学とは、人間の心の重要な特性でありながら、科学の対象から外されていた感性を、主に生理心理学的手法を用いて科学する学問をいう。その際に、生物としてのヒトを視座し、感性は“うまく生きる”ための進化適応上の心の機能として捉える。本講義では、感性の進化的意義を学び、感性計測の基礎から応用まで学習し、感性科学を視座した高付加価値製品の開発事例を通して、今後のもの作りの在り方について理解する。				
全体の教育目標 感性は自然科学の対象から外されていた。その結果、高度な技術化社会が形成されたが、一方人間性の否定等、人間疎外の社会も形成されてしまった。そこで本授業では、安全・安心で心豊かな社会を構築するために感性とは何かを知り、その重要性を意識させ、感性科学の今後の発展性、および感性を重視した製品開発やコミュニケーションのあり方を理解させる。				
個別の学習目標 感性とは何かを理解し、感性を科学することの重要性を学び、感性科学に基づく技術開発の有用性を知る。				
授 業 計 画 (第1回)：感性とは何か(綿貫) (第2回)：感性研究による新しい世界観の創造(綿貫) (第3回)：感性に関するグループディスカッション(綿貫) (第4回)：ヒトの感性と進化(樋口) (第5回)：ヒトの感性と適応行動(樋口) (第6回)：ヒトの感性の多様性(樋口) (第7回)：感性の進化的意義に関するグループディスカッション(樋口) (第8回)：心理測定の基礎(森) (第9回)：感性と生理反応(綿貫) (第10回)：感性と脳機能(金) (第11回)：感性計測に関するグループディスカッション(森・綿貫・金) (第12回)：感性と高付加価値製品の開発(綿貫) (第13回)：感性とコミュニケーション(樋口) (第14回)：感性科学に関する総合ディスカッション(綿貫・森・樋口・金) (第15回)：まとめ				
キーワード 感性、進化、心理生理反応、コミュニケーション				
授業の進め方 通常の授業形態で行う。				
教科書及び参考図書 教科書は特に指定しないが、適宜資料を配布する。				

学習相談 直接の相談が必要な場合は、電子メールで相談の希望日時、相談内容を連絡の上、予約すること。
試験・成績評価等 (評価方法) 本授業では授業計画に示すように、4回のグループディスカッションを行うが、その発言内容や、ディスカッション後に提出するレポート、および試験によって評価する。 (評価基準) 評価基準の割合は設けず、出席状況、ディスカッションでの発言内容、レポート、学習態度、および試験の成績で評定する。
その他 特になし

URL : http://www.ifs.kyushu-u.ac.jp/kss_classes/index/current (ユーザー感性学専攻)

本学府においては、科学的な知の統合と創造を通じて、現代社会が抱える複合的かつ根源的な課題に対し、自らそのような知の担い手として活躍する高度な専門人材を組織的に養成するために、各専攻において特徴的な研究指導が行われている。

本専攻では、多様性への対応力を養う研究指導體制を確保するため、主指導教員・副指導教員制度として、学生が履修するコース以外の教員が副指導教員を担当する制度を導入した。さらに平成22年度からは、各コースにおいて修士研究の中間発表会を6月頃と11月頃の2回開催し、全教員が研究の進捗状況を確認すると共に多様な専門的立場から討議することにより、多面的な理解力や創出力を養成している。なお、この中間発表会を行うことで多様性への対応力の養成が十分可能であることが分かったので、主指導教員・副指導教員制度は23年度より廃止した。

このように、研究指導上の多様な工夫がなされた研究指導が日常的に行われている。

また、学生の教育研究能力の向上を図るためにTA制度を活用している。平成21年度及び平成22年度におけるTAの採用状況は資料3-1-Eに示すとおりである。

資料3-1-E TAの採用状況(延べ人数)

平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
9	2	21	11	14

観点 主体的な学習を促す取組

(観点到係る状況)

本専攻では、学生の自主的な学習を促すために、シラバスに自主学習に有用な情報を記載して公開（前掲資料3-1-C）すると共に、資料3-2-Aに示すとおり院生室を整備している。

また、本学府及び本専攻は、その学問分野において我が国においても類を見ない大学院である。このため、入学直後に新入生オリエンテーションを開催し、本学府及び各専攻の特徴等を学生に説明し、学生が今後本学府各専攻において展開する教育研究活動の動機付けを行っている。また、併せて履修ガイダンスを行い、学府における教育研究活動にスムーズに取り組んでいくことができるよう、授業科目の体系や履修方法、修了要件などについて説明している。更に、ユーザー感性学専攻においては、入学直後に特徴的なカリキュラムの一つである「ユーザー感性学PTL」の研究テーマ等を決定し、入学直後から学生自身がテーマを持って主体的に活動していくことができる環境を整えている（資料3-2-B）。

また、学生の主体的な学習を促す取組みとして、本専攻にあつては、全コースの学生が集う院生室を一カ所に設け、自由な創造活動を促す環境を整備すると共に、学生担当教員を配置し、学生が行う教育研究活動の相談を随時受け付けている。その結果、九州大学の院生や学部生が自ら企画するユニークな研究・調査プロジェクトをサポートする学内事業「チャレンジ&クリエイション（C&C）2009」に、2件の事業が採択されている（全体の採択件数は12件）。また、多様性への対応力を養う研究指導体制を確保するため、主指導教員・副指導教員制度として、学生が履修するコース以外の教員が副指導教員を担当する制度を導入した。さらに平成22年度からは各コースにおいて修士研究の中間発表会を6月頃と11月頃の2回開催し、全教員が研究の進捗状況を確認すると共に多様な専門的立場から討議することにより、多面的な理解力や創出力を養成している。なお、この中間発表会を行うことで多様性への対応力の養成が十分可能であることが分かったので、主指導教員・副指導教員制度は23年度より廃止した。

このように、本専攻においては、学生が自ら主体的に学習することができる取組みを実施している。

資料3-2-A 院生室の整備状況

	自習室数	設備
ユーザー感性学専攻	4室（旧工学部5号館7階）	情報コンセント、パソコン、プリンター等

資料3-2-B 新入生オリエンテーション・履修ガイダンスの実施状況

種別／実施組織	実施時期	実施対象者	実施内容
オリエンテーション／学府	平成21年4月9日、 平成22年4月8日、 平成23年4月8日 平成24年4月6日 平成25年4月10日	1年	・本学府及び各専攻の特徴を説明した。
オリエンテーション・	平成21年4月10日、	1年	・入学式終了後に、オリエンテーションを行った。

履修ガイダンス／ ユーザー感性学専攻	平成22年4月8日、 平成23年4月12日 平成24年4月6日 平成25年4月11日	(授業科目の履修方法、学生相談、各種手続き、 奨学援助等) ・授業科目「ユーザー感性学PTL」に関するオリエンテーションを行った。 (実施方法、チーム別け、テーマ設定の方法等)
-----------------------	---	---

(2) 分析項目に係る自己評価

本専攻では、学府及び本専攻の教育目的を達成するために、高度な知識を教授する講義科目と実践的な知識を教授する「ユーザー感性学PTL」や「インターンシップ」などの演習科目を積極的に組み合わせることによって、全体としてそれぞれ特徴ある教育方法を実現している。また、教育課程の編成の趣旨に沿って適切なシラバスが作成され、活用されている。研究指導方法や研究指導に関しては、学生一人ひとりの興味・関心・進路に応じたきめ細かな指導が適切に行われている。

学生の主体的な学習を促すために院生室を更に整備すると共に、今後も本専攻において教育研究活動を行っていく動機付けとなるオリエンテーションを実施していく。

分析項目Ⅳ 学業の成果

(1) 観点ごとの分析

観点 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

本専攻の平成21年度及～平成25年度の単位取得状況は、資料4-1-Aに示すとおりとなっている。また、本学府全体の休学率は、資料4-1-Bに示すとおりである。

また、前掲資料1-1-Aに示す教育目的を達成するため、本専攻の学生は、講義等を通じて各専門分野における高度な専門的知識を修得するだけでなく、「ユーザー感性学PTL」や「インターンシップ」などの実践的な演習科目を通じて、実社会における実務的知識をも修得している（前掲資料3-1-B）。これにより、講義等を通じて様々な専門的知識を修得するばかりでなく、専門的知識と実務的知識を統合させ、社会の変化に対応しうる実践的な高度な知識へと再編成していく能力も併せて養成している。

上記のとおり、入学した学生は、一般的に学力を適切に身に付けていると判断される。

資料4-1-A 単位修得状況

学年	平成21年度			平成22年度			平成23年度			平成24年度			平成25年度		
	履修登録者数	単位修得者数	単位修得率	履修登録者数	単位修得者数	単位修得率	履修登録者数	単位修得者数	単位修得率	履修登録者数	単位修得者数	単位修得率	履修登録者数	単位修得者数	単位修得率
修士課程	681	664	97.5%	954	880	92.2%	779	713	91.5%	640	594	92.8%	855	792	92.6%
博士後期課程							7	7	100%	2	2	100%	6	6	100%

※ 履修登録者数・単位修得者数ともに延べ人数、単位修得率：単位修得者数を履修登録者数で割った比率

資料4-1-B 休学状況（各年度11月1日現在）

	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
休学者数（休学率）	1(1.5%)	2(3.2%)	5(3.0%)	7(3.6%)	8(3.5%)

※平成21年度の休学者1名は社会人学生であり、職務の都合によるもの。

平成22年度の休学者2名のうち、1名は社会人学生であり職務の都合によるものであり、他1名は一般学生であり家庭の事情によるもの。

平成23年度の休学者5名のうち、1名は社会人学生であり業務多忙によるもの、4名は一般学生であり、家庭の事情による者3名、疾病によるもの1名となっている。

平成24年度の休学者7名のうち、2名は社会人学生であり業務多忙によるもの及び経済的理由によるもの、5名は一般学生であり、経済的理由による者1名、疾病によるもの3名、海外語学留学1名となっている。

平成25年度の休学者8名のうち、5名は社会人学生であり業務多忙によるもの3名、経済的理由によるもの2名、3名は一般学生であり、家庭の事情による者1名、疾病によるもの2名となっている。

観点 学業の成果に関する学生の評価

(観点に係る状況)

学業の成果に関する学生の評価は、日常的な指導教員による聞き取りや授業アンケートなどにより得られ、これらの結果から満足度を評価するとともに、教育改善のためのデータとして活用されている。

本専攻における授業アンケートは、資料4-2-Aのような内容で実施されている。このうち、到達度や満足度を示す項目についての集計結果は、資料4-2-Bに示すとおりである。

アンケート結果からも、本専攻の学生は高い授業の到達度や満足度をもっていることが分かる。また、半数以上の学生が「専門領域についての知識が得られた」「将来役に立つと思った」と回答していることから、学生は「感性」に係る専門知識を着実に修得していると言える。なお、授業に対する改善・要望意見については、教務WG及び専攻運営会議等において取り上げ、次年度以降の授業に反映させることとしている。

資料4-2-A 授業アンケートの内容

目 的	授業の質の向上に資するため、授業科目毎に学生による授業評価を行う。
実施対象	ユーザー感性学専攻 大学院生（回収率：平成21年度21.4%、平成22年度28.20%、平成23年度34.81%、平成24年度48.17%、平成25年度51.80%）
実施時期	授業期間終了後から2週間以内に提出
内 容	<p>1. この授業に関するあなた自身について</p> <p>(1) この授業はあなたの専攻分野ですか？ ①はい ②いいえ</p> <p>(2) 欠席は何回ですか？ ①欠席なし ②欠席1～3回 ③欠席4回以上</p> <p>(3) 授業1回あたり予習・復習をどの程度しましたか？ ①1時間以内 ②30分から1時間 ③30分以下 ④まったくしなかった</p> <p>(4) シラバス（授業計画）を利用しましたか？ ①かなりした ②ある程度した ③あまりしなかった ④シラバスのことを知らなかった</p> <p>(5) 授業内容が分からないときどうしましたか？（複数回答可） ①教員に質問した ②友人・先輩に質問した ③自分で調べた ④何もしなかった ⑤その他</p> <p>(6) 授業の内容は理解できましたか？ ①よく理解できた ②ほぼ理解できた ③あまり理解できなかった</p> <p>2. この授業について</p> <p>(1) 授業内容はシラバスに記載された内容と一致していましたか？ ①よく一致していた ②ほぼ一致していた ③一致していなかった ④シラバスを利用していない（あるいは覚えていない）のでわからない</p> <p>(2) 授業の進み具合はどうでしたか？ ①速い ②ちょうどよい ③遅い</p> <p>(3) 授業内容の理解を助けるための教科書や教材、スライド、配布資料は適切でしたか？ ①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない</p> <p>(4) ノートは取りやすかったですか？ ①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない</p> <p>(5) 内容は理解しやすかったですか？</p>

①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない

(6) 多くの新しい知識、考え方を学ぶことができましたか？
①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない

(7) クラスの受講態度はよかったですか？
①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない

(8) 教員と学生間のコミュニケーションはうまくいっていたと思いますか？
①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない

(9) 教員は授業の準備をよくしていたと思いますか？
①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない

(10) 教員は学生に興味を抱かせるような努力をしていたと思いますか？
①そう思う ②どちらとも言えない ③そう思わない

(11) 総合的に判断して、この授業の満足度はどうですか？
①高い ②普通 ③低い

3. この授業を受けてよかったと思うこと（複数回答可）

① 専門領域についての知識が得られた ② 将来役に立つと思った
③ 関連する領域に興味を持つようになった ④ 将来の進路を決めるうえで役に立った
⑤ 勉学に対する意欲がわいた ⑥ 先生に対する親近感がもてた
その他（以下に記入してください）

4. この授業の改善について要望したいこと（複数回答可）

① もっとレベルの高い授業をしてほしい ② 授業内容をもっと易しくしてほしい
③ 授業に演習をとり入れてほしい ④ 授業テーマ・目標を明確にしてほしい
⑤ 授業内容をもっと精選してほしい ⑥ もっと幅広い内容を扱ってほしい
⑦ 学生の理解度を把握ながら授業を進めてほしい ⑧ 理解できるように説明に工夫がほしい
⑨ 授業の準備をもっとしてほしい ⑩ 成績の評価基準を示してほしい
⑪ 授業に教科書や資料を使ってほしい ⑫ 視聴覚機器を活用・改善してほしい
⑬ シラバスに沿って進めてほしい ⑭ シラバスの内容を充実してほしい
⑮ 教室の隅まで声が届くようにしてほしい ⑯ 読みやすい字で板書してほしい
⑰ 板書量を少なくして欲しい ⑱ 板書量を多くして欲しい
⑲ 授業の開始・終了時間を守ってほしい ⑳ 休講・補講を少なくしてほしい
その他（以下に記入してください）

資料4-2-B 授業アンケートの結果

質問項目	項目	回答				
		平成 21年 度 (%)	平成 22年 度 (%)	平成 23年 度 (%)	平成 24年 度 (%)	平成 25年 度 (%)
授業の内容は理解できましたか。	良く理解できた+ほぼ理解できた	85.7	79.8	85.2	92.2	90.6
	あまり理解できなかった	12.3	16.8	12.8	5.8	5.9
総合的に判断して、この授業の満足度はどうで	高い+普通	91.9	90.8	86.2	97.6	98.0
	低い	6.1	6.7	8.4	1.9	0.8
	無回答	2.0	0.8	5.4	0.5	1.2

すか？						
この授業を受けてよかったと思うこと(複数回答可)	専門領域についての知識が得られた	54.1	50.4	51.7	19.7	21.0
	将来役に立つと思った	55.1	50.4	56.7	16.9	20.1
	関連する領域に興味を持つようになった	59.2	56.3	49.3	22.5	22.3
	将来の進路を決めるうえで役に立った	23.5	9.2	16.7	5.4	6.5
	勉学に対する意欲がわいた	20.4	42.0	36.9	13.4	11.1
	先生に対する親近感がもてた	44.9	34.5	38.4	16.7	16.9
	その他	1.0	0.8	4.9	5.4	2.2
この授業の改善について要望したいこと(複数回答可)	もっとレベルの高い授業をしてほしい	1.0	8.4	1.0	1.3	2.9
	授業内容をもっと易しくしてほしい	5.1	7.6	10.8	8.7	8.0
	授業に演習をとり入れてほしい	5.1	5.9	2.5	6.7	10.1
	授業テーマ・目標を明確にしてほしい	15.3	8.4	14.8	6.7	5.1
	授業内容をもっと精選してほしい	11.2	17.7	12.3	8.0	5.1
	もっと幅広い内容を扱ってほしい	0.0	2.5	3.4	14.7	2.9
	学生の理解度を把握ながら授業を進めてほしい	12.2	7.6	14.8	7.3	12.3
	理解できるように説明に工夫がほしい	8.2	7.6	15.3	1.3	7.3
	授業の準備をもっとしてほしい	4.1	3.4	4.4	1.3	1.5
	成績の評価基準を示してほしい	1.0	1.7	5.4	7.3	3.6
	授業に教科書や資料を使ってほしい	7.1	6.7	7.4	7.3	8.7
	視聴覚機器を活用・改善してほしい	5.1	1.7	3.9	2.0	1.5
	シラバスに沿って進めてほしい	1.0	0.8	0.5	0.0	1.5
	シラバスの内容を充実してほしい	0.0	0.0	1.5	3.3	0.7
	教室の隅まで声が届くようにしてほしい	1.0	1.7	2.5	0.0	0.7
	読みやすい字で板書してほしい	0.0	0.8	2.5	0.0	1.5
	板書量を少なくしてほしい	0.0	0.8	1.5	2.7	0.7
	板書量を多くしてほしい	2.0	2.5	2.0	3.3	5.8
	授業の開始・終了時間を守ってほしい	1.0	4.2	1.0	4.0	3.6
	休講・補講を少なくしてほしい	1.0	0.8	3.4	2.7	2.2
	その他	18.4	6.7	8.9	10.7	14.5

観点 修士課程修了後の進路の状況

(観点に係る状況)

本学府、ユーザー感性学専攻の修士課程は平成23年3月24日、博士後期課程は平成26年3月25日に設置後初となる修了者を出した。修了者の進路は資料4-3-A、就職先は資料4-3-Bのとおりである。

資料4-3-A 修了者の進路

専攻	修了者数	進学者数	就職者数				その他	
			企業等	公務員	その他	計		
修士課程	H22年度	27	7	10	1	4	15	5
	H23年度	35	6	19	2	0	21	8
	H24年度	34	1	24	1	0	25	8
	H25年度	18	1	11	1	0	12	5
	合計	114	15	64	5	4	73	26
博士後期課程	H25年度	3	0	0	0	0	0	3
	合計	3	0	0	0	0	0	3

※就職者数には、社会人学生の業務先への復職を含む。

資料4-3-B 就職先

就職先
福岡市教育委員会、愛和外語学院、博報堂プロダクツ、園田電気管理事務所、有限会社スタジオパラティン、株式会社東海理化電機製作所、マツダ株式会社、株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ、野村総合研究所、東京エレクトロン九州、富士ゼロックス株式会社、ギルフォードカレッジオブアロマセラピー、株式会社ポピンズ、茨城県庁、フラッグ有限会社、特定非営利活動法人子どもNPOセンター福岡、ルネサスエレクトロニクス株式会社、(株)シータス&ゼネラルプレス、おのむら医院、九州電力株式会社(株)マツダ、JAC Trading Group、JFE株式会社、M's Planet一級建築士事務所(自営)、SCSK株式会社、TIS株式会社、愛和外語学院、イオンモール株式会社、イオンリテール株式会社、茨城県、エヌ・ティ・ティ・ドコモ、おのむら医院、九州電力、九電工、ギルフォードカレッジオブアロマセラピー、コイズミ照明(株)、コスモス薬品株式会社、子どもNPOセンター福岡、コンダクト(株)、シータス&ゼネラルプレススタジオパラティン、住友化学、園田電気管理事務所、ソフトバンク株式会社、東海理化電機製作所、東京エレクトロン九州、トヨタ自動車、野村総合研究所、博報堂プロダクツ、パナソニック株式会社エコソリューションズ社、ヒロセ電機株式会社、富士ゼロックス、フラッグ、ブラッツ、ブリジストン化工品西日本株式会社、古河電池、ポピンズ馬出小学校、ルネサスエレクトロニクス、和白丘中学校、花王株式会社、華為技術有

限公司、楽天株式会社、株式会社IMAGICATV、株式会社JALスカイ九州、株式会社さきさく工房、株式会社グランドビジョン、株式会社ジュピター・テレコム、株式会社トヨタ車体研究所、株式会社ニトリ、株式会社フェローズ、株式会社プラメイク、株式会社メディアンスデザイン、株式会社個別指導塾スタンダード、株式会社三越伊勢丹、株式会社電通東日本、株式会社肥後銀行、株式会社琉球銀行、九州電力株式会社、熊本大学医学部附属病院、国立大学法人九州大学、資生堂、西日本電信電話株式会社、西日本旅客鉄道株式会社、大牟田市、東急不動産株式会社、東京建物株式会社、特定医療法人順和長尾病院、南箕輪村、日立ソリューションズ、富士通株式会社、豊田通商株式会社

※社会人の業務先を含む。

本専攻修士課程修了後の就職先は、情報、建築、化粧品メーカー、自動車メーカーなど多岐に亘っている。これは感性という切り口があれば多種多様な就職先が開拓できることを示唆している。

(2) 分析項目に係る自己評価

本専攻では、単位修得率が極めて高く、休学率は極めて低い。

また、学生アンケートの結果に示されるように学生は高い授業の到達度や満足度をもっており、「感性」に係る専門的知識を着実に修得し、自らが「知の統合と創造」をなしえる基盤を醸成していると言える。更に、ユーザー感性学PTLやインターンシップなど実践的な演習科目を通じて、実践的な知識も修得している。

さらに、本専攻においては、「ユーザー感性学」に関する高度な専門的人材を育成することが目的とされているが、学生の就職状況及び進学状況から、それらの目的に沿う教育が実施できていると言える。

このように、学生の学業の成果・効果が総合的にあがっていることが認められ、本専攻の教育目的を達成する教育活動が十分に展開されていると考えられる。

IV ユーザー感性学専攻の新たな取り組み

ユーザー感性学専攻においては、前述した項目ごとの分析のとおり、本専攻の教育研究目的に沿った様々な取り組みが実施されているが、さらなる向上を図るため、平成23年度からは次のとおり改善を行うこととした。

(本専攻における取り組み)

- ・研究指導體制の変更（主指導教員・副指導教員制度→中間発表会）

本専攻では、多様性への対応力を養う研究指導體制を確保するため、主指導教員・副指導

教員制度を導入しており、副指導教員は学生が履修するコース以外の教員が担当することと
していた。これに加え、平成22年度から、新たな試みとして、各コースにおいて修士研究
の中間発表会を6月頃と11月頃の2回開催し、全教員が研究の進捗状況を確認できる新た
な体制を設けた。検証の結果、この発表会では、多様性への対応力を養うという主指導教員・
副指導教員制度の目的に加え、様々な専門分野の教員が一堂に会し、異なる専門的立場から
討議することで多面的な理解力や創出力を養うことが可能であることが判明した。平成23
年度からは、中間発表会の充実を図り、これにより多様性への対応力を養うと同時に多面的
な理解力や創出力を養っていくこととし、主指導教員・副指導教員制度を廃止した。

- ・ P T L 科目の拡充

本専攻では、「ユーザー感性学 P T L」を6科目設け、履修内容に応じ、単位認定を行っ
てきた。平成23年度からは、同科目を4科目増やし、合計10科目とすることで、さらに
多岐に亘る領域において P T L が実施及び認定できるようになった。

- ・ チャイルドライフコミュニケータープログラムの設置

平成23年度からの新たな取り組みとして、医療・教育・文化・芸術等の諸機関における
子どもの生活の質を向上させるという社会的課題に対応する教育課程を展開することによ
り、知識基盤社会を多様に支える高度知の人材を養成することを目的として、チャイルドラ
イフコミュニケータープログラムを開始し、同プログラムに必要な科目を履修し、修了要件
を満たした者に対し、修了証を交付することとした。

- ・ 就職先の開拓

ユーザー感性学専攻の平成22年度修了生の就職先から、感性という切り口があれば多種
多様な就職先が開拓可能であることが示唆された。そのため、ユーザー感性学の存在を社会
にアピールしていくことが重要な課題となる。初年度の結果を踏まえ、今後は、シンポジウ
ムの開催を通して産学官にユーザー感性学を啓蒙すると共に、就職支援専門担当を設置し、
企業への広報、進路指導及び就職活動の分析を通して就職状況の改善を図ることとした。

- ・ 教育支援システムの導入

平成23年度よりユーザー感性学独自の教育支援 SNS・K A S A を開設し、教員、学生、
卒業生における専門領域情報、就職情報、活動情報等様々な教育支援システムとして活用し
ている。

※本報告書に記載の事項を無断で転載されることは固くお断りします。転載を希望される場合は、利用目的を記載した申請文（様式は問わない）を下記までご送付いただきますようお願い申し上げます。

工学部等事務部総務課庶務係
〒819-0395福岡市西区元岡744番地
TEL : 092-802-2708
E-Mail : ifs@jimu.kyushu-u.ac.jp